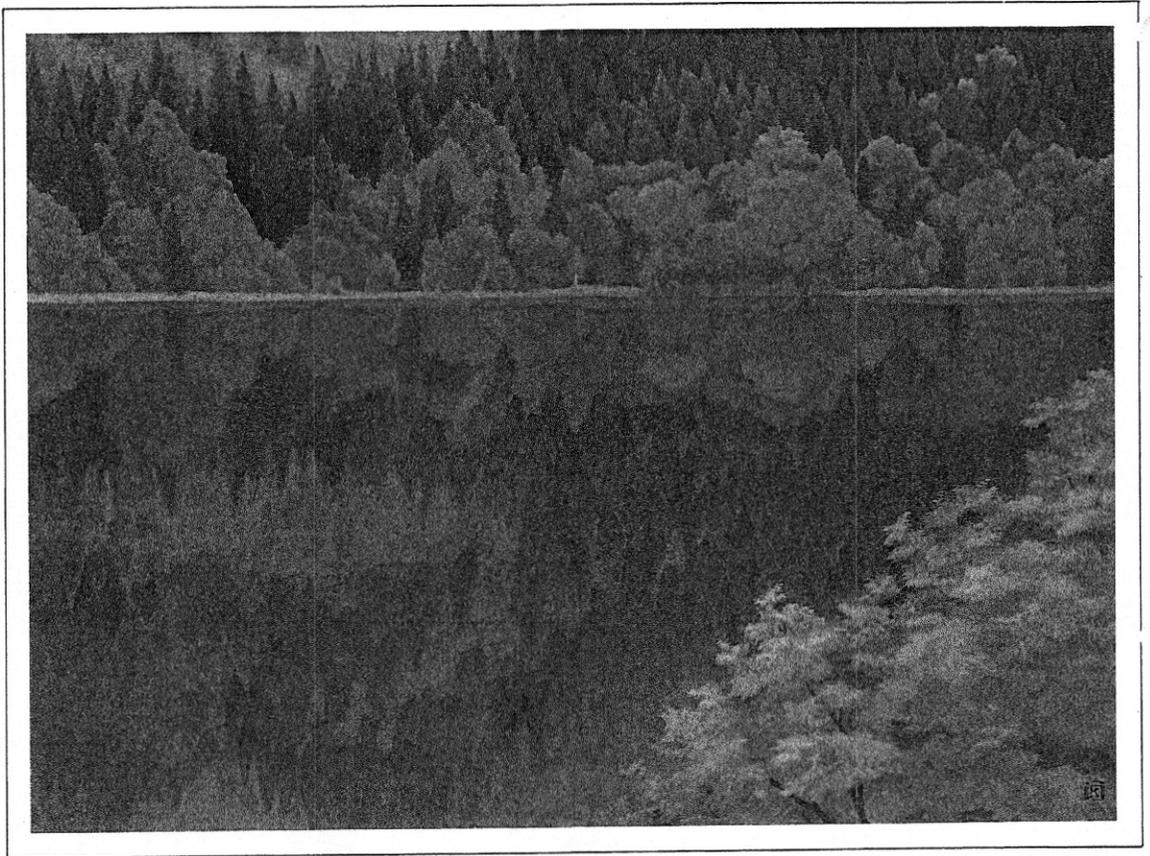


国民と森林

1985年・夏季
第 13 号



国民森林会議



自然保護と林業は対立しない

八木健三北海道自然保護協会会長に聞く

—先生は地質学者ですが、自然保護運動に入られたのはどういうきっかけですか。

八木 地質を選べてあちこちフィールドを歩いてきましたが、その中で自然破壊のひどさを感じていました。一九六二年に北海道大学に来ましたが、六五年に北海道自然保護協会に入りました。道協会の結成がその前年ですから、もう二〇年になります。

—北海道自然保護協会のやっていることといますと—。

八木 北海道の優れた自然を守っていききたい—ということで運動してきました。

一般的な啓蒙としては、自然観察会、講演会、映画会などそれぞれ年数回開いています。こととして五回目になる自然観察指導員講習会は日本自然保護協会と共催でやっています。第一回の羊蹄山から養老牛、大雪、ニセコとやってきましたが、今回豊羽自然学園を利用します。三日間の日程ですから限られたことしかできませんが、東京や道内からの講師が、

実地に自然観察の仕方を講義・実習します。

終了者には指導員の資格を与えています。毎回六〇人ぐらいの参加者で、指導員になった方がたは各地のリーダーとして活躍しています。

季刊の「NC・自然・環境・人」の発行や年誌「北海道の自然」の刊行もしています。

—自然度が本州の三倍という北海道だけに開発の波も受けやすいですね。

八木 そうです。今までも、恵庭岳の冬期オリンピック滑降コースや日高横断道路の開設に反対してきました。千歳川放水路建設による広範な環境破壊の心配があることや、支笏湖畔の美笛に、一大レジャーセンターをつくることなどにも反対し、行政官庁に慎重な検討を求めています。こうした運動が住民にも浸透してきました。

また、環境庁・道・自治体などからの委託調査も積極的におこなっております。これらは会費収入だけでは運営の難しい協会の財政面も支えていますし、またヒグマやゼニガタアザラシ、シマフクロウの生息や調査に一役買っています。シマフクロウの人工巣づくり

やぎ・けんぞう 一九一四年長野市に生まれる。三八年東北大学理学部卒。第一回フルブライト留学生としてコロラド鉱山学校とカーネギー研究所に学ぶ。東北大学教授、六二年北海道大学教授。七八年退官し北星学園大学教授。日本火山学会委員長、日本岩鉱学会長など歴任。東北大学名誉教授、北海道大学名誉教授。国民森林会議会員。北海道自然保護協会会長。

にも取り組んでおります。

—昨日のシンポジウムでも協会の創立二〇年を記念しての論文の応募など記念事業の紹介をされましたが。

八木 論文も予想以上に多数の方がたから応募がありました。そのほか、チャリティ展をやって純益のうち三三万円を知床の一〇〇 μ 運動に寄付をしました。また、本多勝一さんや加藤幸子会員など一〇人の筆になるエッセイ集「北海道の自然と人」（築地書館）が記念出版として近く刊行されます。

—先生は昨日のシンポでも現地実行委の一人として準備もされ、司会もされたわけですが、終ってみてどうでしたか。

目 次

季刊

国民と森林



No.13 1985年夏季号

〈巻頭インタビュー〉

自然保護と林業は対立しない

八木健三北海道自然保護協会会長に聞く

■特集・国民の森林を考える北海道フェスティバル

写真一巻頭グラビア…………… 2

シンポジウム 北国からのアピール………… 5

問題提起(高橋延清/倉本聡/大内力)………… 6

参加者の討論…………… 9

アピール/14 サイン帳から/12 協賛展/13

参加者の声…………… 15

■特集・教育森林

「教育森林」を各界に提言…………… 18

実例にみる教育森林…………… 20

三重県/埼玉県/多摩市/札幌市/北九

州市/大宮市/熊本市/上野村

随想 民有林の活性化 佐藤和之…………… 26

第15回自然保護大会から 上山たけし…………… 28

トピックス…………… 30

緑の文明学会/議員連盟/関税引下げ対策

切抜き森林・林政ジャーナル…………… 32

第3回朝日森林文化賞に三会員…………… 34

会員の出した本…………… 35

雑木林の経済学/秘境への旅

会の動き…………… 36

表紙 湖青む頃 東山魁夷 1971年製作

南ドイツの山湖 54cm×73cm

目次題字 隅谷三喜男

カット 森前しげお

八木 三人のバネラーが個性豊かに、ユニークな観点から話されて面白かったと思いますね。小関先生の司会も自然の流れにそって、いてフロアから声が出るようにされたのはよかったです。とかくあのようなシンポジウムでは、なかなか意見が出なくて困るのです。今回は意見も多く出たし、それらが建設的で良かったと思います。アンケートの結果をみても成功したと思いますね。欲をいえば、自然保護と林業の関係をもう少し突込んでやりたかった感じもしますが…。

—先生としては自然保護と林業の調和はできるとお考えでしょうか。

八木 両者は決して対立するものではない。しかし皆伐ですっかり伐つてしまい、後の木

もろくに育たぬやり方では、林業は自然にダメージを与えることになる。貴重な所は伐らないで、そのほかの所で伐っていくことは可能です。自然はある意味では人間が育てていくことも必要で、それには林業は大切な役割を担っています。自然には原始自然、管理された自然、人工の自然があつていいのです。林業は自然保護と共存できます。

私の父は、長野県で女学校の校長を長くしていました。伊那女学校の時は新設校でシラカバ・サクラ・ドウダンツツジを校庭に植えました。立派な林になり、木造の校舎をコンクリートに改築するさいも苦労して残したようですが…。また飯田女学校の時は学校林をつくり生徒と一緒に植林をしたようです。後に学校を改築する時に役立ったと聞いています。そんな父の思い出があります。

学校の周囲に林をつくったり、自然保護教育を学校教育の中に取り入れたいですね。

(先生のお宅は札幌市の南部が一望できる藻岩山の中腹。庭にもそれに続く山にもむせかえるような緑がありました。拝見したスケッチブックは二四〇冊目。一九七八年には退官記念として数え子たちが、このスケッチを画集にして出版したとのこと。山や植物が多いスケッチは水彩で鮮やかに描かれていました。六七年からワンダーフォーゲン部の顧問になった先生。「送って行くよ」と帰途わざわざ山間の小径を選んで案内して下さいました。)

写真

国民の森林を考える北海道フェスティバル



ギッシリつまった会場、TVも取材



隅谷会長も成功を訴え



横路知事もかけて祝辞

北海道はもうすっかり初夏。爽やかな緑の風の吹き抜ける札幌市で開かれた「国民の森林を考える北海道フェスティバル」は、五〇〇人近い人びとを集めて、「北海道の自然をどう守り育てるのか」と熱っぽい議論をくり広げました。その一日を写真で追ってみました。



討
論

ユニークなパネラーに会
場の発言も：



会場からも発言

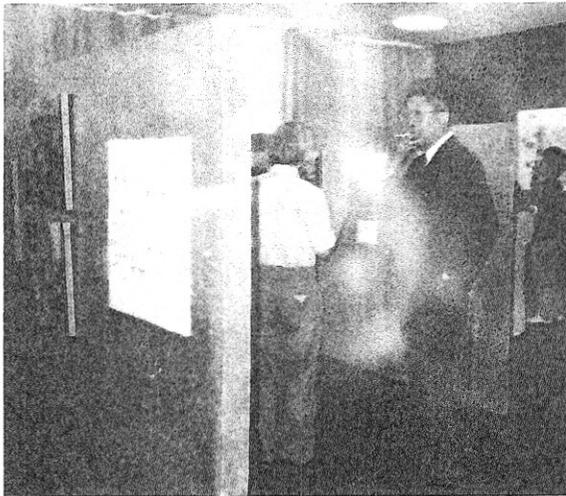


八木北海道自然保護協会会長の司会で



札幌市立大学 志村富寿
 森林総合研究所 杉本 一
 全日本森林組合連合会 田中 茂
 京都大学 半田良一
 教育経済財成会 松沢 謙
 日本山岳会 篠野敏雄

幹事も顔を見せてアドバイス



パネル展も森林・林業の大切さを――。



アピールは石川美佐さんが朗読。



森林・林業・野生動物の本も売れていました。

国民の森林を考える北海道フェスティバル

共感呼ぶ多彩な催し

自然環境の豊かな北海道から国民の森林を考えアピールしよう—という「国民の森林を考える北海道フェスティバル」（主催 国民森林会議、後援北海道、北海道新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社）は、六月二二日札幌市自治会館で開かれました。

当日は朝から映画会（「樹海」「森林浴」、森林や林業の役割を説明したパネル展（図版四点、写真二点）、山村の産物や木工品の一村一品の展示即売など、ロビーも二つの会場も、催しでいっぱい。映画にも予想を超える二五〇人も人が参加しました。午後一時からのシンポジウムが始まる頃は、参加者も五〇〇人近く、会場はいっぱい。八木健三北海道自然保護協会長の開会の言葉と司会で、隅谷三喜男国民森林会議会長の主催者あいさつ、横路孝弘知事も来賓で祝辞をのべました。ついで小関隆祺北海道大学教授（実行委員長）をコーディネイターとして、三人の問題提起、熱のこもった参加者との意見交換があつて、その後「アピール」を採択して終了しました。

開会のあいさつに立った八木北海道自然保護協会会長は「協会結成二〇周年の記念行事として論文と作文の募集をしました。一般から六五人、中学生九五人、小学生四七七人の応募があつた。道民の緑への思い入れの深さを実感したと紹介、そうした道内でシンポジウムが開かれる意義をのべ、このシンポジウムの成功のため参加者の協力を要請しました。

つづいて、隅谷三喜男会長が立って「世界の森林が病んでいることに関心をもつ志を同じくする者が、三年前国民森林会議を結成した。森林の問題は、森林、林業の専門家だけの関心事ではなく、国民一人ひとりの問題である。この会議は一一二人の各界各層の人を集めて問題提起しているが、国民的基盤をつくるため、北海道のフェスティバルもその一つとして開いた。

森林の背後には山村がある。山村は日本社会で取り残されるのではないか—という思いがあり、外材に押されて日本林業も斜陽。その上に自然としての森林がある。自然としての森林、その中の山村、それを支えている林業。問題は複雑だが、どうしたら統一的に森林を守ってい

くことができるか、どうしたら病んだ森林を健全にできるか追求してほしい」と主催者のあいさつをしました。

ついで横路知事が来賓として祝辞。

「北海道は森林を伐り開いて築かれた。自然と闘った人は自然の厳しさも知っていた。先人の残した防風林を伐り、防風ネットを張ったが自然には勝てなかった。

道民一人当たりの森林面積は全国の四倍、植生自然度も全国の三倍、天然林もまだ多く残っている。しかし、都市の緑は全国平均だし、森林にふれる機会も少ない。道有林も立入禁止にしないでもっと森林に親しむ機会をつくるべきだ。そこから自然保護がスタートする。恵まれた自然を忘れないで開発と自然保護で森林のつ接点について改めて考えてほしい」と成功を祈ってメッセージ。

そのあと、コーディネイターに小関実行委員長を指名。小関先生の紹介でパネラー全員と、出席の国民森林会議幹事の紹介のあと、パネラーの問題提起に入りました。

〈問題提起 1〉

二度童子（にどわらし）11年をとって子供に出来る「ドロ亀さん」は、森の中で生き生きとしていても壇上ではあわれ（笑）。

北国の森林の四季のうつりは鮮明だ。

まず紅葉の美しさは日本一だ。日本一ということとは世界一だ。こんな美しい表情をする森林は世界にない。

冬、広葉樹は葉を落して眠っている。トドマツさん、エゾマツさんは寒気に耐えてじっとしている。静寂です。しかし吹雪もある。そんな朝、造材飯場を出て山へ

森林の中に感動がある

高橋 延清さん

——東大卒業後東大演習林林長として退官まで演習林一すじの学究。「ドロ亀さん」と自称の東大名誉教授

（司会者紹介）

ます。

然パリパリという音がして、何か落ちてきた。上を見ると、エゾリスさんが朝の食事だ。

冬の朝外へ出てみるとキツネの足跡が直線で



東京大学名譽
高橋

続いている。その先に行くくとバタバタとした羽跡。エゾライチョウの飛び立ったあとです。エゾライチョウは雪の中にもぐっているのですが、それを探してキツネは夜中歩きまわったのです。

エゾライチョウは小さな羽四・五枚を落して飛び去っていました。

春を山に働く人が感じるのは沢です。沢水の冷たさがゆるむ、ヤチブキの芽がで、黄色の花が春を告げます。それを見ると、「やれやれ春が来た」と喜びます。白い花のキタコブシ、ついでヤマザクラが咲きます。春の喜びに小鳥たちはパートナーを見つけ巣をつくる。虫も現れ

て——。

春は木の芽がすばらしい。カツラの芽は真っ赤、イタヤも赤、カバさんは、シナノキさんは黄色いハナ、エゾマツは赤い雌花。その世界のみごとさ——。しかし、春は短い。

夏が来る。夏の夾かさは溪流のそばと、汗しで登った尾根だけ。それ以外はムンムンする夏は成長の季節。木は成長し、小鳥は巣立ち、エネルギー、活力にあふれたシーズンだ。

秋の紅葉で森林の華かさは一気に表われる。やがて落葉。山小屋に泊って淋しいのは落葉だ。やがてみぞれが降ってくる。キタキツネはトボ

トボと歩いて、ちょこんと座っている。初雪で森の中は明るく愉快です。

ドロ亀さんは、東北のブナ帯で生まれ、幼い頃からうさぎとりのワナを仕掛けたり、川で魚を追い、山の幸をとってきた。二度童子の私は、いまでもその遊びをそのままやっているようだが、それでよいと思っている。

森林の中には感動があります。発見があるのです。森林の自然生態系は他にない世界。そこへ皆さんを案内してきました。

昨夜もアオバトが鳴いていた。キセキレイをやっとみつけたが川の上でなく、木の上の高いところに居ます。きつと

巢のありかを知られたくなかったからでしょう。

「ブッポウソウ」と鳴くクノハズクも鳴いています。

今朝はマガモを二羽みました。子供がいないんです。さみしそうだった。道には、葉っぱにくるまり、自分で封印した虫があちこちに落ちていました。オタマジヤクシは四日前より大きくなっていた。四日前は山は二八度でセミが鳴いていたが、今朝は涼しくセミの声はなかった。マタタビの葉は白く美しかった。

山の表情は豊かで、見る人によっていろんな表情を見せてくれます。私たちが、近づけば近づくほど、すばらしい世界を見せてくれるのです。どうですか。皆さんもドロ亀さんと一緒に森林を見てみませんか。（拍手）

〈問題提起 2〉

九年前から富良野に住んでいます。森に囲まれた田園で、周りには木がいっぱいです。それだけに森が破壊されているのが毎日見えます。かつて、森を伐るのは造材資源としてだったが、いまは開発です。その開発には三つの形があります。

その一つは観光開発です。最近私の森に隣接する森が伐られ、都市の分譲地のように区画造成されました。所有者である内地の不動産業者がペンションとして分譲するためにやったものらしい。

市へ行って「どうして林の中にペンションを建てないで、都会の宅地みたいに木を伐るのか」といったわけですが、する

と業者は「それなら木を植える」というんです。外国では、林の中に家を建てて、日本は木を

伐って家を建てる。

二つ目にはこんなことがあります。川原に柳が群生していますが、どうもお役所というところは、治水上から柳が邪魔と考えているようです。それを切ってブルドーザーで平にしてみよう。柳は本当に害樹なのか。柳は柳なりに何か必要があるのではないかとボクは思うのだが、お役所はそんなことを考えない。

三つ目は農地開発です。食糧危機、機械化農業のための整備ということで、森林を農地に転用する。富良野は全国一のニンジン出荷量をもっているが、その四〇％は規格外といわれ流

森林の大きな価値を知ろう

倉本 總さん

北海道に在住、北国からの鋭いメッセージを送って御活躍の放送作家

(司会者紹介)

良しとしている。

通に拒否され捨てられています。一方で、森林を伐り農地造成という。しかもこれには八〇％近い、国家と道の資金補助がつく。国や道は明らかに、森林破壊に手を借しているわけです。自然林を伐ってカラマツ林にした。カラマツの価値がないと伐って農地にする。

ボクは四ヘクタールの谷間で塾をやり若者と暮している。そこで地元の人が「夏でも枯れぬ、二〇〇人分の水はまかなえる」という泉から水を引いていた。ところが昨年の干バツでその水が枯れた。ボクの所だけでなく、囲りの農家の井戸も枯れたのです。

上の方の山や森が伐られ、土砂が崩されたところが原因でないか。開発は水の路もズスタにしている。水の調整弁としての森林の機能は大切です。

森林はそれが民有のものであっても人類共有の物でないのか。森が伐られ、柳が切られ、コンクリートで固められた川はおかしい。

アイヌ民族は水が出て流れがよく変る川を「ベツ」と呼び、流れがかわらない川を「ナイ」と呼びました。のめる水は「ワッカ」、のめぬ水は「ベ」という。ワッカナイは「そばに住んでも大丈夫だし水ものめる地」という意味です。

日本の川の名は筑後川だとか文学的である。役人の頭の中には「ワッカ」も「ベ」もなく一把一かけです。科学と信じて一律にやることをもって

一・二ヘクタールの公民館用地を演習林から払下げ受けようとし「木は残してほしい」と頼んだが、「実験が終ったから払下げのだから立木を全部伐らねばだめだ」という。そのうちに木は伐られてしまった。森林の専門家でさえこのありさまです。

森は単純な精神的価値でもなく、また、木材資源としての価値のみでもなく、もっとも大きな実質的意味を持っています。人間はそれをもっと知るべきです。(拍手)



作家
倉本

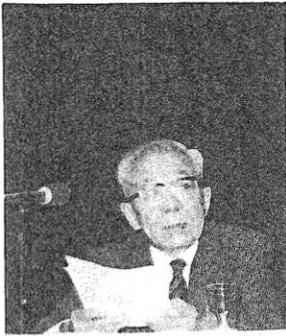
〈問題提起 3〉

森林を大切にすることは、森林をそのまゝにして放っておくことだ——と考えている人が多い。たしかに奥山まで乱開発が行われて、一〇年前に北海道に来た時には「裸の山は国有林」と教えられたぐらいだから、その反動から、そういう見方が出てくることも理解はできる。

しかし、自然は人間が十分に賢く手助けしていかなければ力を発揮できない。放っておけば活力は失なわれる。間伐をしないと、過密のために木は枯れるし、風倒木もでる。松喰虫もきちんと後始末をしないと広がらるのだ。山の活力を維持する働きかけは不可欠である。

しかも木材がなければ人類は生活できない。これ

れまで日本は世界中の森林を荒らしてきた。フィリピン、インドネシア、マレーシア、そしてブラジルまで丸裸にした。戦争中日本軍がさんざん苦しめられたニューギニアの密林も今はな



東京大学名誉教授

大内

人手かけ森林を活性化

い。戦後日本が伐ってしまったのである。今急進しつつある南の世界の砂漠化は地球規模で気象を始め環境に広範な影響を与える。

これ以上人類の生活条件を破壊しないためには、日本も自国の自然を正しく維持して、必要なのは自国で賄う努力をしなければならぬ。

森林を活力あるものにし、必要なものをそこから得ながら、しかも環境も良くしていく——ということを考えて、国民森林会議は今年「教育森林」の提言をした。

今、都会の子どもたちは、自然から切り離されて、コンクリート・ジャングルの中で暮し、

伝えることで、将来も日本人が森林の価値を正しく評価しそれを守ることを考えるようになることも期待している。

なお、近く国民森林会議は「山村問題と担い手対等」についても提言をまとめる。今、山村は過疎化がすすみ、労働力の高齢化、女子化が深まり、山村の沈滞、森林の荒廃を招いている。しかし山村の活性化は林業だけでは達成できない。山村の農業をどう発展させ林業を生かすつつもっと生産性の高い農業をやる方法はないか。混牧林もその一つであろうが、いまの農政はそちらへ目を向けていない。また、山村の規模エネルギー源をもっと有効に開発し、それを利用した産業の開発も考えなければならぬ。

大内 力さん

農業経済の権威者として幅広く活躍の東大名誉教授

(司会者紹介)

さらに林業については、え、国有林、民有林、

小学校に入る頃から塾通いを強いられている。このように自然と無関係に置かれていることが生活の感性の荒廃を引き起こしている。そうして育った人間が、やがて日本を背負うのかと思うと恐ろしい気がする。

そこでわれわれは、森の中で自然から学び、また仲間同士の連帯を深め、かつ山林維持のためどんな困難があるかを子供たちに知らせる、

そのために一年にせめて一カ月位は山で集団生活をしような施設と制度を作ることを提案した。しかし同時にそれによって高齢化した山村を活性化し、また長年の生活の知恵を子たちに

クビを切って手抜きを強め、民有林は人手不足でろくに間伐もやらず荒廃を深めている。地域社会を一体化して、国有林の組織や技術も活用しつつ、施策、技術を追求していくことが不可欠である。

国民森林会議は色々知恵をもちよって提案することはできても、その実現は国民世論のバックがなければできない。どうかわれわれの努力のバックアップをお願いしたい。(拍手)

〈参加者との対話〉

“森林への思い”出しあい

資源を大切にしたい

こうした三人のパネラーの問題提起を受けて、参加者をふくめての討論に入りました。

会場(男) 一十年前南校で学校林活用を提案したが一笑に付された。ローカルエネルギーの利用は急務だ。木を植えていても、エネルギー問題の解決がないと意味はない。酸性雨も予見される中で二一世紀が人類の幸せかどうか、危機感を持っている。砂漠化に手を借しているのは新聞社でないか。大量の紙を使用し



コーディネーターの小関先生

することで森林を破壊している。紙オムツ、割りバシもそうだ。新聞紙の代用も考えねば

…。

大内 現在の化石エネルギー中心のやり方は資源上も環境上も問題が多い。集中大規模エネルギーだけでなく、生活に必要なエネルギーを地熱、ソーラー、小落差水力発電などの活用でまかなっていく工夫が必要だ。

二一世紀に核融合が安全に使えるまでのつなぎとして原子力発電をどう考えるかはむずかしい問題だ。日本の原発の安全基準は世界一だ。その基準をきっちり守る体制ができていない。また三〇年の寿命といわれる炉が廃炉となった時どうするかも未解決だ。そうした問題の結論がでぬまま、実績が積み重ねられていくことが問題なのである。理論的にいえば化石燃料をそのまま大量に使い、汚染を拡大するより、原子力、核融合を旨く利用し環境破壊を防ぐことが賢明かもしれない。

小関 このまま化石燃料の消費が続けば、森林でも浄化できないことを認識しておかねばならない。

杉本幹事(森林文化協会専務理事) 木材は再

生可能な資源です。日本に緑はあるが、手入れ不足で質が悪くなっている。間伐材も利用されないで放置されている。山の手入れによって資源を再生し、緑の質を良くすることが緊急である。

木材の利用はその一環である。新聞紙は古紙として回収しほぼ半分が再利用されている。むしろ問題は、広葉樹材でなければできぬ上質紙やコンピュータ関係の紙をどうするかだろう。国際経済からいっても、コストの安い所から輸入されることはやむを得ない。木材の生産は悪でなく、資源の浪費をさけ循環させることが必要。

小関 人間が高い生活水準を維持するため、地球上から資源を求めることによって環境問題が発生する矛盾について、発言されたことは貴重な問題提起だったと思います。

国有林問題にもっと目を

会場(男) 二一世紀は国産材時代といわれるが、林業労働者一八万人のうち五〇歳代が半数を超え、女子化している。いまの政策では山林労働者の確保はできない。森林の活力を維持する労働者の確保は林業だけでやれるのか。地域全体で相談しあってプランづくりが必要でないのか。

国有林は荒廃が甚だしい。財政的に大変だということ人で減らし、十分手入れも少ない。そうした、自助努力、は国民の山の破壊

につながらる。時代の要請に依じての過伐のつ
け、材価低迷がそうしたことを招いたが、国
民の山として七七〇万ヘクタールの国有林を
再建するには新たな政策が必要と思うが。

国際森林年で緑・森林への関心が高まって
いる。森林を守り育てていく主導権を国民森
林会議がとってほしい。

小関 国有林問題は国民全体の立場で考えてい
くべきでしょう。広く皆さんの意見を聞いて
提言していきたい。もう少し御意見を聞いて
みたいと思います。

会場(男) 世界平和は自然を守ることだ。国
民世論をバックに強気に提言してほしい。国
の政治の焦点にしてほしい。「自然保護・森
林愛護の日」を設けてはどうか。一市町村の
行政では力は弱い。青少年の非行防止のため
にも自然と親しむことは大切だ。

高橋 農畜林の経営を考えてきた。草地造成に
は八〇%国費、道が一〇%の補助をする。北
海道のように大規模草地をつくとダメにな
り破産してしまうケースがよくある。ハイテ
ク技術がすすみ、牧草と同じものが材木から
つくれる。白カバから飼料をつくり、白カバ
乳、なんていうものが売り出される日も近い。
森林の生産力を最大にしていけば、そこか
らいろんなものがとれる。政治家が一番遅れ
ている。

乱開発は予算づけに一因

会場(男) 倉本さんの隣接地がペンション用
地にされたのは、「有名作家と隣接してあな
たのペンションがあります」という宣伝に使
うためだ。商売人のガメツさを見る。

森林が荒廃し、人口の流出が続くのは、資
金が森林に投下されないからだ。分収育林も
金がほしいからやっている。

森林の機能は木材生産だけでない。大気浄
化、国土保全など六つの公益的機能があるとさ
れているが、それは時代と共に拡大するので、
L S Iの生産に清い水が必要なら森林は産業保
護機能ももつ。また、米国がベトナムで枯葉
作戦をやったことをみても軍事上も森林は大
切。公益的機能をカネに換算してもっと知ら
せるようにすべきだ。

国や道の指導にそい努力し、市有林の人工
林率は八〇%になったが赤字に悩む。カラマ
ツ人工林二〇〇ヘクタールを天然林の複層
林にすることをしているが、作業員は五倍に
なった。

小関 山に手をかけることは皆さんの発言でも
一致します。公益的機能の評価は難しい。森
林の機能をもっと引き出すことはいいが、そ
の中にはお金に換算できぬものもある。

会場(男) 機能総量をもっと高めることだ。
レク機能は人間性を回復していくものでおカ
ネでは換算できない。価値に結びつけた説明

を広く国民にしてほしいということだ。

経営の限界こえた林業

会場(男) 毎年八〇〇ヘクタールの草地造
成がやられているが、それは予算があるから
だ。農林予算のうち、造林は六〇億円だが、
農地はその一〇〇倍はある。一対一〇〇はひ
どい。開発した農地のうち一〇〇〇ヘクタ
ールは不採算農地になる。その予算で木を植
えてもいいと思うが、そうしたことを高度の立
場で判断してほしい。

民間林業は「非常に苦しい」を通り越し、
限界だ。林業をやってみて、四〇年代までは
インフレ益があった。造林への投資価値があ
ったが、オイルショック以来、限界を通り越
した。

木の価格は安く、超長期であって、どんな
産業でも六〇年後のことを考えて投資をする
ことはないが、林業もそうだ。その間一回も
相続税を払えば終りだ。林業は経済企業の限
界を越えた。

会場(男) 自然保護論者から、割りバシや紙
のことがでるが、「木を伐ることが悪」とい
う気持からでることは問題。森林を活性化す
るには伐る、植えることは大切。

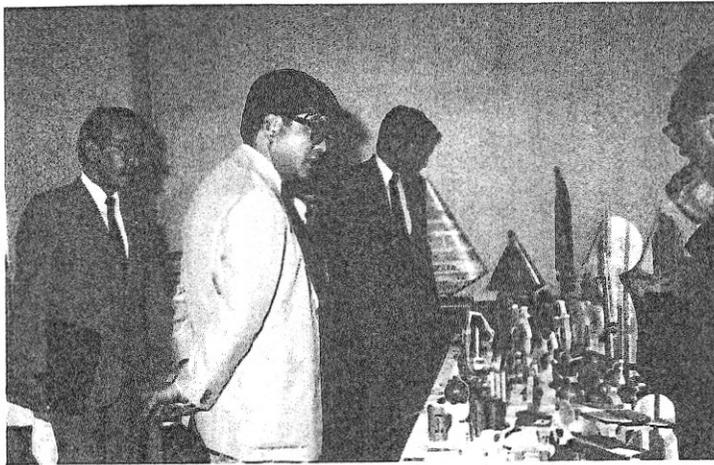
パルプや割りバシは、大根に例えれば葉っ
ぱや尻っぱを有効に使っているので、例え、
「割りバシを使わねば家何軒たつ」という論
議はおかしい。



参加者のサインに応じる“ドロ亀さん”

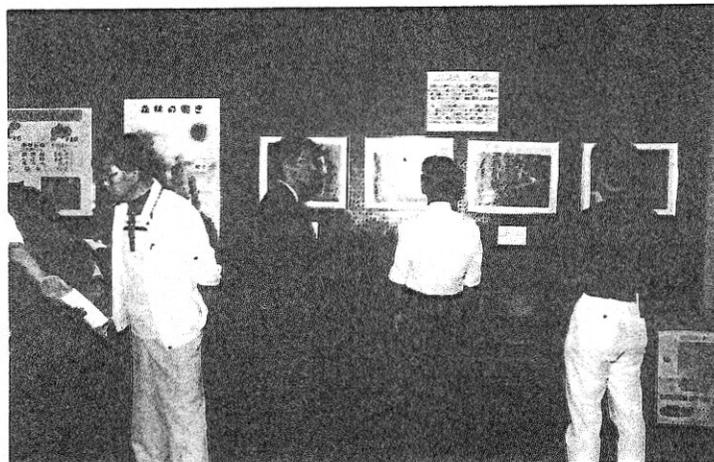
政治がわからぬ森林の価値

高橋 午前中に上映した「樹海」は、一二年前に二年半かけて作ったものだ。国有林の大量積伐の誤りと「道をつくるな」「山から木を伐るな」という自然保護論者の誤り、それらを正したいと思い、仲間たちと金を出し合って映画をつくった。木は上手に伐れば伐るほど山は良くなるものだ。



横路知事も「一村一品」の成長に目を細めて

大内 国有林問題については、今年度中に国民森林会議として検討し、提言をしたいと思っ
て今準備に入っている。
山にはカネに換算できぬ価値がある。それなのに、山の問題をカネのこととしてのみ考えているのが今の国有林政策だ。国有林野会計では元利の支払いが、収入の二〇％を越えている。これを木を伐って払えというのはそもそも無理な話だ。もともと超長期の計算で考えるべき林業について単年度の収支均衡を



多くの人にアピールしたパネル展

中心に考えようとする今の会計制度が間違っている。これでは国有林を丸裸にしても採算が合わないだろう。しかも、それなら手抜きでいこうというのが今の林野庁のやり方だ。
林業そのものは民間でも採算はとれないのが普通だろう。いわんや国有林はカネの収支でものを考えるのでなく、国民生活全体のためカネに換算できぬ価値をふくめてそれを国民の財産としてどう生かしていくのかを考えなければならない。

倉本 富良野でも残された民林を優遇できない

か、と聞いています。外国では公共的な働きをするものに免税がやられ、それが建物の保存・統一・街なみづくりに役立っている。ところが、森についての優遇を富良野でいっても市でやれることは限界がある。支庁、道、開発庁、林野庁とお伺いを立てなければならぬ。森のことが大切であるなら、国が統一の立場として考えるべきでないか。森というのはそれ程の大きな問題であることを政治のトップは認めていない。森の大きさがわかっていないのではないか。

森が伐られる、そのつどボクが文句をいうと「オレにいても仕方ないベヤ」と地方の役人がいう。それを聞いていていつも、国の政治のあり方を考えます。

半田幹事（京都大学農学部教授） 民有林の採算をどう考えるか。三〇年前には林業家は「採算はとれていたら」と感じていた。そうした民林従事者の活動によって、森林の安定状況が保たれてきた。三〇年代の前半には林業への投資の利廻りは八割ぐらいと算出されていたが、今は二・三割。民有林従事者の努力で守られてきた森林が（木材価格など）外部の条件が悪くなつて維持できなくなつた時に、森林の果たす公益的機能を訴えて不足分を補うよう世論を喚起することが必要だろう。その一つとして水源基金がある。その他（の機能）についてもコンセンサスを得るようしていくことが今後必要だろう。

萩野事務局長（大日本山林会常務理事） 紙に

は情報伝達、包装、ふきとりの三つの機能があるが、情報伝達の分野で木離れが起きることを林業人も心配している。

森林の公益的機能について林野庁がお金に換算して四十七年に公表しました。一・二兆八〇〇〇億円というものでしたが、日本の算出の中には酸素の供給というのが計算されています。米国の同じ計算では酸素の供給は入っていません。公益機能は国により時代により刻々に変わります。

会場（女） 帯広畜産大学の学生ですが、割りバシを使わない運動をしています。割りバシを作っている小さな工場をつぶすのか」といわれましたが、そんな気持でなく、ムダ使い、使いすてをする世の中でいいのか——を問いたいです。ムダに自然を破壊するところがガマンできないのです。

木を伐る人は木と生活して木と人間の関係で見ているが、山には動物もいる。森林はダムを作ることでも破壊されている。全体を見てほしい。十勝ダムのため水没するシマフクロウの巣のことで心を痛めた。「森林の日」で山へ行こう——と発言があったが、山にゴミをすてる人がふえるだけではないか。いまは人間のモラルを向上させないと山へささうこともできない。

会場（女） 札幌市西区の主婦です。私たちの近くの山が砂利採取で一三年間も崩されよう

サイン帳から

ここに紹介するサインは、八木健三先生が、当日の参加者に求められたものです。先生の御好意でその一部を公開させていただきます。

ありやこまったよ

今回は、何なのか

そうを、国民森林公園
のようぞ、...



丁ばいまくても

つもあつたか

北の国から

八木健三 聡

としています。ぜひお力添え下さい。

北国からのアピール発表

小関 熱心な討論で定められた時間もかなり越えました。森林を大切に育てて、資源、環境として大切にしていこうという御意見が多く出されました。御異存がなければこのシンポジウムのアピールを採択して、シンポジウムを終わりたいのですが――。(拍手)

それでは石川美佐さんをお願いします。

(アピール朗読)

八木 割りバシ一本五グラム、新聞一ページで



二本半とれる。新聞社が一年のうち一カ月広告を半分にするに割りバシ分は生みだされる。森林の価値は年三〇兆円はあると推定される。ダムを経費を林野庁にまわすことで緑のダムとしての効用ばかりか、多くの森林の機能も生み出せます。そうしたハイレベルの判断がいまこそ必要です。

本日はフロアからも多くの意見が出され盛り上ったシンポジウムとなりました。日本の上で、森林がすこやかに伸びていくことを祈念して、この会を閉じたいと思います。(拍手)

(文責・編集部)

協賛して展示即売

国民の森林を考える北海道フェスティバルに協賛、会場での展示即売の店は――。

△ハンズマン丸和V動物などの形をとった木製のデジタル時計、オルゴールつきの木製インテリア・アクセサリ、パズル、デスクウエアなど。

△北海道きのこ農協Vしいたけ・しめじなど数種類の栽培きのこや本など。

△占冠村山村産業振興公社Vタケノコ・ゼンマイなど山菜の加工品やみそなど。

△林業改良普及協会Vマカバ・カラマツ製の名刺。その場で注文する人も。

△野生生物情報センターV自然保護関係の図書。

森林に活カも

人類に幸せも

大内カ

北の国の澄んだ空の下

森林の緑への

新しい価値体系を求めて

一九八五年六月二日

陽友三 友男

「国」の森林を育てようシンポ

1985.6.22

手紙は誰のメールか

小関隆子

ある先輩のことば

「親」という字は

立木を見るときに思ふ

子供に木を植えて

残したい。田村良次

〈国民の森林を考える北海道シンポジウム〉

— 北国からのアピール —

すべての力を森林に——二一世紀のために

〈いま、国民にとってなぜ森林か〉

森林は、資源としても環境としても、人間の生存にとってかけがえないものであり、今進みつつある地球的規模での荒廃は、まさに人類の生存基盤そのものを失わしめるものである。

先進国では、大気汚染や酸性雨のため森林の破壊が進み、発展途上国では、過度の森林伐採と焼畑移動耕作などのために森林破壊がとどまるところを知らず、砂漠化が急速に拡大しつつある。

わが国においても、無秩序な開発による森林の破壊が進み、他方、林業生産活動の停滞と山村地域の衰退によって、森林資源の荒廃が深まり、いまや森林は危機的状況にある。

これは、現在の国民生活にとって重大な事態であるばかりでなく、子孫の生存のため一刻も猶予できない状況にある。

私たちはこのことを強く認識し、今こそ、森林が時代をこえて国民すべてのためのものであることをあらためて確認しなければなら

ない。

〈森林を国民のものとして、二一世紀へ引き継ぐために〉

森林を今日まで宮々として築きあげてきたのは山村地域の住民であるが、いまや森林を国民のものとして二一世紀へ引き継ぐためには、森林は国民すべてのものであり、国民すべての力をそこに結集しなければならぬ。

森林の存立を林業部門や山村地域住民だけにまかせるのではなく、国民すべての責任において、国民的資産としてこれを守り育ていくことが必要である。

今こそ私たちは、かつてアデナウアーが言った「すべてを森林に」を合言葉に、森林の維持と活性化にむけ、すべての英知と行動を結集し、子孫のため国土を緑豊かなものとして引き継いでいかなければならない。

私たちは、「国際森林年」にあたり、未来を拓く北国の札幌の地から、この願いを強く訴えるものである。

〈来賓〉

横路孝弘 北海道知事

田村良次 北海道林務部長

〈祝電〉

自然に囲まれた北海道の森林を考えるフェスティバルの開催にあたり心からお祝いと敬意を申し上げます。

日本の自然を愛し、森林を大切にするため国民一人ひとりが森林を守り育てて行かなければなりません。

明日への美しい北海道を展望し、本日のフェスティバルの御成功と皆さんのご健勝をお祈り致します。

衆議院議員 岡田利春

国際森林年にあたり、意義あるシンポジウムの開催を心からお祝い申し上げます。二一世紀を展望し林業林産業の安定的経営と、緑と健康を守るため、シンポジウムのご成功をご期待申し上げます。

衆議院議員 奥野一雄

緑多い北海道が限りなく好きです。これから緑を守り育てるため、共にがんばりましょう。

参議院議員 対馬孝且

シンポジウムに 参加して

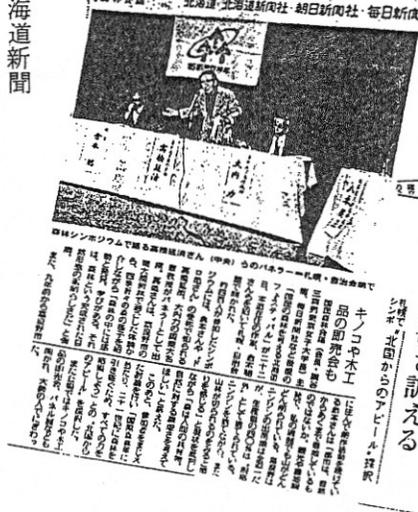
子孫に豊かな国土を

北国からのアピール採択



北海道新聞

森林の大切さ訴える



毎日新聞

森林、自然の素晴らしさを喜々としてお話ししてくれたドロ亀先生にとっても感銘を受けました。又、今回、シンポジウムに参加させていただいたことにより生活、労働の場としての森林ということに関しても再認識をしました。自然が自然であるための人間の在り方、保護、開発。とても難しい問題ですが、一人ひとりが考えていかなければいけない重要な問題だと思いました。

× ×

子供の頃、山のふもとの私の家は、みわたすかぎりの緑がありました。木登りとさまざまな生きもの達を見つけて出すことが私の最大の喜びでした。しかられてもしかられても私は毎日木

に登り続けました。その頃の自然はーなつかしさと共にー何とすばらしいメッセージを幼かった私に与えてくれていた事でしょう。波の音や風や水の流れはあの時と変わらずに流れています。でも土は、木は、海はあまりにも急速に、自然の再生力に追いつけないはやさで失われてきていることにとても不安を感じます。私の小さな力でいったい何ができるのか、これから先の課題です。地球からのすばらしいおくりものを受けとめられる愛する人々の為に残しておきたいと思うのです。(今、そうではない人々にちよっぴり皮肉をこめて)

×

SACHIKO N

×

現在、富良野市に住む一主婦ですが、新聞を拝見して、今日のシンポジウム「北国のアピール」を楽しみに、今朝早く出かけて参りました。三人のパネラーの方のそれぞれのお話を興味深く拝聴いたしました。専門的なことは何もわかりませんが、日頃は、何となくあわただしく暮らして、つい忘れておりましたが、私たち毎日の生活をして行く上で森林の大きな関わりをここであらためて感じさせていただきました。

今日一日、ぬか味噌くさい台所から離れて、とても高度な会議に出席させていただいて心楽しく帰ることができます。ありがとうございます。

岡 (元東京大学北海道演習林勤務ー主婦)。

倉本さんの農地開発に関する所説には全く同感です。

これと関連して、一団地数百haにのぼる農地開発（森林破壊）にはふれずわずか数十haのスキー場造成を問題にするマスコミ、自然保護関係者の態度は片手落ではないか。

私は、朝日がやっている自然一〇〇選の企画が嫌いです。一人ひとりが大切に思っている自然に対して、人気投票で順位を決め、一〇〇に限定して、なんておかしいと思います。また、東京や大阪の人間がただ一時訪れた観光地を投票する。彼らは一体何を感じたのであろうか。

礼文、利尻等の候補地があるが、利尻だって礼文だって住民にとっては生活の場であるのである。そして冬はそこそ東京の人間等には想像もつかないはずである。「隣りの大自然」を残すために、それで良いのである。

一票でも一〇〇票でもその個人にとっては大切な自然であるはずである。そこに人気ベスト一〇〇など無意味である。地道に行われてきた自然保護の運動がミーハー的ですからある盛り上りをみせたあと一気にしぼんでしまわなければと思う今日このごろです。

会場にて朝日のコーナーがあったので最近思っていることを書かせてもらいました。この候補地をみていると自然で何だろう、自然保護で何だろうと思ってしまう。

（北大林学学生）

林業・林産業はいままさに剣が峯に立たされています。一方では森林は社会資本としてますます重要性を増し、要請もされています。

しかし、国の予算は雀の泪ほどです。水の問題、国土保全の面、さらに山で働く人たちの生活を守るためにももっともお金の投入が必要ですよ。

木の机、木の椅子、フローリングの床など木製品を学校教育に取り入れ、木との感触をもつこと、自然のなかで遊ぶことなどを通じてできるだけ自然物のなかで教育を進めていくこと、全人教育の上からも必要ではないでしょうか。

林政を国の最重要項目としてPRするよう頑張ってください。応援します。

「ローマは一日に成らず」の言葉通り、いったん破壊された自然は復興するのに永い年月が必要となります。森林に限らず、自然を大切にすることは、われわれ一人ひとりの責任です。それには子供の教育に自然に関する勉強をとり入れ、またクラブ活動にも大いに組み入れる事が良いと思います。特に森林は、健康の面からも役立つ大切なもので、ヨーロッパでは療養に温泉と組合せ森林浴が活発と聞いています。

その面でも益々大切な森林に私共も大いに関心を持ち、愛してゆきたく思います。今後益々PRして下さいます様お願いします。

倉本さんのお話しに同感です。

農業、林業政策の中で、もっと根本的に考えなければならぬと思います。美瑛の大規模、林地転換の場所を見たが、山を平にした広大な砂、石、岩石の上に五〜一〇cmの土をのせてそれで、農地になるとは考えられない。数年で牧草地は荒地に変わると思います。

農政として生産の調整、一方で農地開発？食糧の考え方が根本的に考える時に来ていると思う。

大変有意義な大会でした。森林の重要性を、それぞれの観点から再認識できました。

国際森林年ということで行事にかなり出席してきましたが残念ながら政治家の関心がどうもうすいように思われてならない。

森林の保護及び推進をする人を社会教育を継続的に行い、関心の強い政治家を選出すべきであると思うので貴会議の特段の努力を希望します。

もち論このようなシンポを知り行うとともにパイオについても話すべきではないか。話を聞きながら記入したので文脈は乱れているが、要はすこし政治家に働きかけを強めてもらいたい。

森林は有資源、再生できる資源である。再生は何によって出来るか、アピールやセレモニーでは出来ない。資金が重要である。このことを

何んとしてアピールに盛込んでほしい。

本当に国土の三二%の占める国有林をみてほしい。緑(森林)は、病める重病人である。

村岡(枝幸郡中頓別町)

× ×

自然保護は極めて大切なことと考えております。しかし、ごく一部の人に限られているとは思いますが、保護派の方がたは、一切手を加えず放置することを良しとするかのような主張を強硬にしている。

映画「樹海」の二部にもあったように、適切な手入れをし管理が必要であることが、もう少し啓発されるべきと思う。

国立公園の特別保護地域の保護は当然のことながらこの点についても、開発を一切排除し、極端には石ころひとつ動かしてもいけないという発想は、国民共有の森林や公園を私物化しているかに考えられる。

国民森林会議の機能はよく存じてはいませんが、森林の公益機能への理解を高めることと、同時に自然保護と開発の課題を大いに取り上げていただきたい。

× ×

シンポジウムに参加して、難しいことはよくわかりませんが、あらためて、森林の大切さを実感しました。

パネラーの方々のお話もとても考えさせられました。

今日は、参加できて、とてもよかったです。

× ×

子供たちにも是非このような機会を与えてやりたい。

× ×

高橋先生のお話しは、森のいぶきを感じさせ、第一回のお話しとしてふさわしいものであったと思います。子供に森の生活を味わわせたい。

× ×

森林の価値を金銭的な面において考えることは、かなりの無理があると考える。何十年もの年月をかけて育ててきた木を無理に価値をつけるとしても市場の製材から逆算して計算をしている現実には森林の未来に不安を感じるのである。

そこで今までの考えをくつがえし、森林の価値を金銭的ではなく、自分の子供のように考え大切にしていかなければと思う。昔の人々は、改めて森林の意義を論じていただろうか？ もっと自然に大切を感じ、その中に生きていたと思う。

人間のおごりから、不安な世の中になったことは、本当に悲しいことだ。

× ×

どろ亀さんが大きな森林をみせて呉れた思いが致します。

札幌郡広島町・渡辺 信吾

× ×

私は二〇歳の女の子ですが、行政のことはよくわかりません。森林というと、自然という観点からしか見ることができませんでしたが、今日、お話を聞いて、産業としての森林、経済としての森林を感じました。

(伊藤)

でも、子供じみているかもしれませんが、本当に思うことは、森を、緑を、心から感じ、心から愛することだと思えます。もっと世の中の人達が森を身近に感じ、好きになってくれればいいと思えました。

それから、子供達を森林にふれさせるというには大賛成です。でも、子供達を森にふれさせる大人が、しっかりと森を知っていなければならぬと思います。私達も学校で林間学校などを体験しましたが、先生が、森に親しんでいるとは思えませんでした。

× ×

こういう運動を行なっているということをもっとアピールしてほしい。

今日上映したような映画をもっと作るべきです。

× ×

P・S 日高スーパー林道だけはやめてほしい。横路さんへ

森林浴の映画場面について、もっと活性化を図るために歌やゲームの場面があったらよいのではないかと思われる。

歌はステージやカラオケ用のものでなくみんなが森林浴しながら歌えるもの。

ゲームは手軽に用具を持参できるもので、いつでも、どこでも、誰れでもが対等に楽しめるものを考案されたい。

「教育森林」を各界に提言

農林・文部両大臣にも会見して

国民森林会議は三月三〇日の第三回臨時総会で「教育森林」の提言を採択、直ちに関係方面へこの提言の実現を求める要請をおこないました（要請先別掲）。

特にこの制度創設にかかわる農林水産省と文部省には直接出向き、大臣に提言を手渡して要請をおこないました。

〈農林水産省〉

四月一三日、隅谷会長、大内・志村幹事、萩野事務局長が大臣と会見。

まず国民森林会議の結成と主な活動をのべたのち「提言」の趣旨を説明し、大臣にその実現を要請しました。

佐藤大臣は「極めて意義あることだ。ぜひ実現したい。国有林でも検討させたい。この実現について文部大臣とも協議したい」とのべ、自ら文部大臣の自宅に電話し、「国民森林会議から説明を聞くこと」を要請しました。

当時、文部大臣との会見は事務局段階で日程がとれなかった状況であっただけに農林水産大臣の助力は大きいものでありました。

佐藤大臣はさらに林野庁に「この具体化について検討する」ように指示、「モデル的に実施できるところは希望地について林野庁の検討」も指示しました。

これを受けて同日、林野庁長官にも申し入れをし、江藤業務部長に会って要請しました。林野庁側は「森林の教育的利用について検討したい。この問題で国民的関心が高まり林野庁としても支援を得たよう心強い。林野庁はこれまでさまざまな森を設定し取り組んできたが、今日の申し入れの趣旨に基づき、森林の教育的利用について検討をすすめる」とのべました。

国民森林会議は「文部省とも十分連絡をとって具体化してほしい」と要請しましたが、林野庁は「主旨は十分理解できるので、まず当方でのような方法がよいか検討したい。国有林の中に——という旨も受けて検討したい」とのべました。

二六日、林野庁側と事務折衝。この中で林野庁は「教育的利用」ということで検討をすすめている。この種の国有林利用については、国有林の持ち出し的にならなっていて、いま、



佐藤農林水産大臣に申し入れる隅谷会長（右から二人目）

国有林の財政状況が苦しい時に、管理・維持費



松永文部大臣に申し入れる隅谷会長（左）と大内幹事（右から2人目）

分を国有林に他から入れることができないか検



江藤林野庁業務部長（左から2人目）にも申し入れ

討している。文部省との関係についても、例えば、自然教室・関係を設定できないかどうか、その前に国有林としてどう対応できるか、前向きに検討している。六一年度予算でやれるかどうか検討してみたいとのべました。

△文部省▽

四月二〇日、隅谷会長、大内幹事、萩野事務長らが松永文部大臣に面会、提言の主旨を説明し実現の努力を要請しました。特に「林野庁とも事務レベルで協議して実現するよう」申し入れました。

松永大臣は「高校でも取り組んだらどうか」と前向きの発言をし、関係部局に「具体化するよう」指示しました。

これを受けて五月二四日文部省関係部局と事務折衝をおこないました。

文部省の事務レベルでは「提言の趣旨はわかるが、文部省としては、自然教室、等の措置で取り組んでいる」という考え方でした。国民森林会議は「①、森林」と、自然教室がセットになっていないこと ②森林教育のリーダーがないこと ③父兄の理解 ④指導要項の不備」などを指摘し、「新たな発想が必要である」と強調しました。

文部省側は、暗にそのことを認めつつも、「教育問題は地方で自主的に取り組むべき」ことをのべ、全国的に文部省として取り組むことに消極的姿勢でした。

△提言の提出先▽

内閣総理大臣、衆議院議長、参議院議長、農林水産大臣、文部大臣、臨時教育審議会、林野庁長官、日本経営者団体連盟、経済団体連合会、経済同友会、自由民主党、日本社会党、公明党、民社党、日本共産党、新自由クラブ、社会民主連合、全国森林組合連合会、緑の地球防衛基金、日本労働組合総評議会、

中立労連、全国産業別労働組合連合、全日本労働総同盟、日本教職員労働組合、全林野労働組合、国立大学協会、公立大学協会、日本私立大学連盟、全国高等学校長会、日本私立中学高等学校連合会、全日本中学校長会、全国連合小学校長会、日本野外教育研究会、日本PTA全国協議会、教育設備助成会、文部省記者クラブ、農林水産省記者クラブ加盟全社

实例にみる「教育森林」



国民森林会議が「教育森林」の提言をして以来、その具体化について「モデルを示すべき」という声も出ています。その地域に合ったメニューを住民・教師・子どもたちと一体で作ろうというのが、会議の考えですが、参考までに、短時日の例ですが紹介したい。

子どもたちはどう受けとめたか

体験林業三日間の感想

国土緑化推進委員会（徳川宗教理事長）は林野庁が五九年度からおこなった「ふれあいの森林」に、青少年の野外活動としてどうかかわらすべきか——の実験を実施しました。

この対象になったのは「緑の少年団」（全国一二〇〇団体、一二万人）のうちから、東地区（埼玉県⇨飯能緑の少年隊が横瀬村の県民の森で）、西地区（三重県⇨菰野町緑の少年隊が同町の県民の森で）を選んで、体験学習（苗木づくり・植林・下刈り・枝打ち・間伐・加工）、自然観察（植物・動物・土壌・天体観察）、野外生活（キャンプ・炊飯）のプログラムを実施しましたが、その結果は——。

△三重県▽

菰野町五地区の緑の少年隊一六〇人の中から四年生以上一二〇人の参加を得て、八月八日から一〇日までの三日間行動しました。

8日⇨県民の森展示館前に集合。1班8人の班編成。開校式（猛暑のため4、5人が倒れ、冷房のある学習室に変更）につづいてキャンプ地まで移動、昼食、枝打ち作業（約2時間）、自然観察、夕食（竹筒炊飯）、スライドでのグループ学習会。

9日⇨6時起床、バードウォッチング、朝食、間伐作業（72人）、ワラジなど加工体験（48人）、昼食後交替。男子は間伐材利用でトマ屋

づくり。この日キャンプファイヤー。
10日11時起床、朝食、ふれあいの小道での自然観察、学習のまとめ、12時半解散。

八崎玉県

飯能緑の少年隊は五八年結成、約一〇〇人。八月二四日からのこの実験には中学一年生一小学三年生の六二人が参加した。

24日11時飯能駅前広場で1班7-8人の班編成。11時県民の森着、開校式、「水のふるさと」上映。広場で昼食、記念樹、展示館での森林の学習。その後センターで部屋割りの後、竹細工(竹グシづくり)

25日11時起床、センターから実習地へ行き下刈り(39人)、間伐(28人)の実習。昼食をはさみ13時45分まで交替しながら2時間40分の作業。自然観察やマスのつかみどりをしながらキャンプ地へ移動。夕食・キャンプファイヤー。

26日11時起床、片付け、研修室で活動のまとめ(作文)、12時35分解散。

こうした体験林業を子どもたちはどう受け止めているのでしょうか。寄せられたいくつかの作文の中から紹介してみました。

林になるまでは大変だ

菟野町みどりの少年隊朝上隊

6年 小池 健 一

僕の大好きなキャンプの日が来ました。天気



はよいし、だれと班になるか楽しみでした。僕は五中隊の1班です。そして班長です。その上、五中隊の中隊長です。頑張らなければと思いました。

昼のお弁当を食べて、午後は枝打ち作業です。説明を聞いていろいろなことがわかりました。自分の身長が3倍ぐらい木の高さぐらい下のほうの枝を、幹の付根からきれいに切りました。きれいな松林や杉林を見ますが、林になるまでには、大変なんだなと思いました。

そして、集合訓練広場で自然観察の説明を聞きました。僕は学校への行き帰り、山の中の道を通っているのですが、木の名前はあまり知りませんでしたが、いろいろな木の名をおぼえました。夕食の準備、男はまきを取りに山へ行きました。かれ枝を取ってきました。女子はお米をといだりました。そして、竹でごはんを作りました。竹ごはんはおいしかった。竹でたく

のは、初めてだった。夜植物のスライドを見ました。ヒル間見たのがたくさん出て来ました。星のスライドと説明をききました。

望遠鏡で土星などを見ました。僕は初めてだったので、長く見ていたかったです。

テントでさわいでいたので、しかられてねました。8月9日、今日も良い天気です。パードウォッチングで今日の行事の始まりです。多くの鳥のなき声と名前をおぼえました。朝食はハンゴーでお昼の分も作りました。昼のは、おにぎりにしました。

全体が午前と午後に分かれて作業です。僕は午前中テーマ活動です。おじいさんや、おばあさんになわなを教えてもらいました。次にぞうり作りです。なわは、うまく出来たけど、ぞうりはむつかしかったです。おじいさんがワラモッコを作って見せてくれました。昔の人は、あれで石など運んでいたのかと思いました。午後は、僕たちが間伐作業です。まがっている木やちいさい木を間引切りするのです。そして、日当たりをよくしてよい木を育てるそうです。

間伐した木をキャンプ場まで運んで来て、昔の人が住んでいたと思う小屋を作りました。また、おじいさんから、なわのむすびかたをおしえてもらいました。夕方ファイヤーの準備をしました。女子は、おばあさんと一緒に大きな釜でシオハンを作りました。広場でおとしよりと大人のひとみんなで食事をしました。一七〇人ぐらいが一緒に輪になって食事したのは初めてです。とてもおいしかったです。ファイヤー

は、7時から始まり、たいまつに火をつけてファイヤーの井げたに火を付けました。ものすごいいきおいでもえました。班ごとに出しものがあり、僕らの班は、おろかもの、でした。みんなすぐたのしかったです。みんな、つかれてるので早くねるのだと思っていたが、11時半ごろまでねなかつたです。

8月10日、朝ラジオ体操をして朝食。そして、最後の自然観察をしました。ツツジが一番多かった。

この3日間、いろんなことを覚えて楽しかった。また、やりたいです。

枝打ちってなにかな？

菰野町みどりの少年隊菰野隊

5年 堀内 優子

緑の少年隊のキャンプに行った時、どんな子と班になるのかな、友だちになれるかなと思いました。そして開村式をして、班別になった時、ぜんぜん知らない子となったので、ともだちになれるかなと心配でした。でも、すぐ班の子が話しかけてくれて、友だちになりました。

キャンプ場に行くとき、暑くて汗がだらだらでてきて、えらかった。キャンプ場についてからおべんとうをたべました。とてもおいしかったです。

それから枝打ち作業に行きました。枝打ちってなにかな？ なんのためにするのかな？ と思っていたけど、おじさんたちが教えてくれた

ので、よくわかりました。ひの木の枝をのこぎりできりました。おじさんが、かれているひの木をみつめて、「枝打ちをしないから、かれてしまったんだよ」と教えてくれました。とても暑かった。そしておじさんたちが車で水とお茶を持ってきてくれた。その時のんだ水はとてもおいしかった。

キャンプ場に帰って、夕食の仕たくをしました。きょうはたけごはんだときいて、たけごははいつているごはんかと思っていたら、たけごはんとはしらなかつた。そして夕食をたべて、木と星のスライドを見せてもらって、いろいろな木や星を覚えしました。望遠鏡で、たけごはんの星を覚えられたのでうれしかったです。つぎの日、バードウォッチングに行きました。

先生の話を聞いたら、イカルという鳥が鳴いていました。川にカワガラスがいて、ヒヨドリも鳴いていました。ツバメもとんでいました。いろいろいました。かわいかったです。わたしの一番好きだったのは、ヒヨドリでした。

おばあさんたちに、わらぞうりのつくり方を教えてもらいました。わたしは、初めわらでひもを作るのを教えてもらいました。初めはむずかしかつたけど、一生けんめいになっていたら、なれてうまくできるようになった。

こんどは、間伐作業に行きました。そしてきつた木を運んでわらの家を作りました。帰ってきたから、女子だけおふろにはいりに行きました。とてもきもちがよかったです。

キャンプファイヤーをしました。ほのおがす

ごくきれいかったです。わたしたちのはんは、四季の歌を歌いました。へたくそだったけど、ほかの班のおどりは、とてもおもしろかったです。わたしはキャンプファイヤーがいちばん楽しかったです。

初めての竹細工

飯能緑の少年隊

6年 上原 武志

1日目……1日目は、最初なので、つかれてなくはりきっていた。やはり、1日目に印象に残っているのは、竹細工だ。ぼくは、竹でいろいろな物を作ったのは、初めてでした。

最初にはしを作りました。ぼくは、うまく出来て、けがをしないかなあと心配でした。少しやってみるとだんだん慣れていったが、やはり初めてなので、深く切りすぎたりしてしまいました。出来てみると自分でもまあまあよく出来たと思えました。くしもうまく出来ました。

2日目……ぼくが一番楽しみにしていたのは下刈り作業、間伐、丸太切りです。

最初に、間伐、丸太切りでした。ぼくは、あんな太い木を切るのは初めてで、うまく切れないかなあと思ったけど、わりあい切るのはいくらでした。切りたおした後、その木をまた切りました。それは図工でもやっているの、すごく良かったです。

次に下刈り作業でした。そこには、テレビ埼玉の人がきていて、最後の部分をやりました。

ばくは、インタビューされました。

勉強になった植木

飯能緑の少年隊

6年 塩野貴美

8月24日(1日目)

くもっていてとっても寒かった。植木を植えるのは初めてだったので、とっても勉強になった。植える時、空気を入れてはいけないということは、初めて聞いたので、これから木を植える時は気を付けたい。

8月25日(2日目)

下刈り作業では、かまの使い方を教わった。

最初はなかなかかかれなくてつまらなかつたけど、だんだんなるようになった。自分でかつた所を見ると、とっても気持ちよかつた。それから、テレビ埼玉の人がさつえいに来た。わたしは目立つのはいやなので、きんちょうした。それから、弁当を食べた後、沢で水を飲んだ。

(写真とも「青少年野外活動モデル実験事業報告書」||国土緑化推進委員会||より)

八ヶ岳で「体験林業」

多摩市の小中学生一、五〇〇人が

長野営林局諏訪営林署が、八ヶ岳連峯の南端で、体験林業^{*}を実行し始めて三年になります。この間一五〇一人の小中学生たちが、汗を流し山

づくりを体験しました。

「体験林業」を思い立ったのは営林署側。国有林に接している富士見高原にある四つの「少年自然の家」には年間三万七〇〇〇人もの小中学生が訪れます。この子どもたちに「林業を体験してもらい、自然を体で感じ、森林・林業の理解を」という考えで多摩市立八ヶ岳少年自然の家に働きかけました。

同施設の賛同を得て五七年から「体験林業」が始まりました。この年に施設に近い防火線刈りに四校三二一人が参加。翌年は自然生えのシラカバの苗を掘り取って、登山道の両側に植えたり、カラマツの自然生えの苗を掘って七キロも離れた山に植林する本格的作業や道づくりにも五校四六三人が参加しました。五九年は、こうした作業に加えて治山や造材も加わって一〇校七二七人の参加となりました。

子どもたちはほとんど多摩地区の団地の子どもで、山に入った時には草の上にも座ることも、まして土にすわることもできませんでしたが、作業の終る頃にはもうすっかり自然ととけ合っていました。

子供たちの感想は「大変な作業だったがやりとげられて嬉しかった」「森林をつくる苦労がわかった」「森林の大切さがわかった」「石やバラや枝葉などの作業環境に驚いた」「植林のあとなんだか神様になったような気がした」「大きな木を伐った時の気持や音が忘れられない」などとのべています。

一方、引率した先生の中からは「子どもたち

は、今回のように一生懸命働いて汗を流したことは初めてであったと思う。やったことが社会のためになることや、成果が具体的に形になって現われることで、一層意欲が高まり、大変良い社会学習になった」「体験林業は、単なる労働だけでなく、夢を育て、生きる喜びも感じさせる」「無意識のうちに、グループ内が協力しあって作業がすすめられる姿が見られた」と成果を評価しています。

営林署側が、森林教育の視点だけで取り上げたかどうかは別として(このことを報告した文に他の教育的成果をあげたほかに「事業の効率に寄与」という一項もある)多くの子どもたちに森林とのかかわりを植えつけたことは事実でしょう。

「ふれあいの森」始動

「教育森林」的な色合いも

広く都市住民に緑とのふれあいの場を提供しながら、森林づくりを通じて都市住民と山村住民が交流し、山村・森林への理解と活性化をはかるうーという、ふれあいの森林^{*}制度が五九年度からスタートしました。五九一六二年度までに全国一二カ所を整備(一カ所一億一〇〇万円、補助率二分の一)し、国民参加の森づくりの呼び水にしたい考え。

初年度は札幌市・北九州市・大宮市・熊本市の四市の、ふれあいの森林^{*}づくりがすすめら

れましたが、この例から「教育森林」的な実例を見てみますと――。

△札幌市▽

札幌市の中心より南東に一五キロ、豊平区の市有林一二〇ヘクタールに設定。ミヤマクワガタ、クマゲラ、キタキツネや野生スズランなど動植物にも恵まれています。

ここで「ふれあいの森林友の会」を中心として都市近郊林にふさわしい森林づくりをすすめるようという考え方です。

除伐や間伐、植林地の準備（地ごしらえ）は見学的体験ですが、植林は「友の会」と児童と



作業員の共同作業。年五一〇ヘクタールを一

〇年間実施。下刈り、つる切り、枝打ちは「友の会」と作業員の共同作業となり、児童は見学参加。つる切り、除伐は六〇一七〇年、間伐は六八年まで毎年五一〇ヘクタール実行します。このほか森林愛護活動への参加、自然体験学習、レクリエーションなどへ参加します。

「友の会」の会員にはイチイの苗木や間引木の配布、あつせん、木工材料の供教、山菜やキノコとり、施設の優先利用のほか、森林浴や探鳥会への招待がされます。

こうした活動にあてるため、セミナーハウス、間伐木を利用した炭焼きが体験できたり、炭の加工製品ができる施設（ここでは市内の小中学校二四三校二〇万人が使用する木工用資材を提携）、エゾサンショウウオやイワナの復元もめざした防火槽、自然を採勝しながら学べる歩道コースなどづくり、指導員を常駐させます。札幌市の事業としておこない事業費約一億円。

△熊本市▽

熊本営林署管内の熊本市、北部町、河内町に広がる、くまもと自然休養林の一部六五〇ヘクタールが対象地。事業はこのうち四七ヘクタールに。

熊本市、北部町、河内町で「熊本地域ふれあいの森推進協議会」をつくり、企画・広報・啓蒙活動をおこないます。作業などは「ふれあいの森林協力会」をつくり、三市町住民、学校単位の児童、各種団体サークルを会員としておこ

ないます。

ふれあいの森記念植樹のほか、加入団体による植林や育林、緑の少年団とその父兄との共同作業での森林づくり、学習館を利用したのりーダー養成、間伐材を利用しての木工や民芸品づくり、わらじや日曜大工が計画されます。また、森林浴のつどい、探鳥会、植物観察会、林間親子スケッチ大会も定期的に開きます。熊本市の事業としておこない事業費は一億八〇〇万円。

△北九州市▽

帆柱ふれあいの森として設定されるのは北九州市にある国有林で約四〇ヘクタール。ここで「ふれあいの森育成会」を市民・児童・生徒・各種団体でつくり事業をすすめるようというもの。計画では部分林（成林伐採後収益を造林者と分配）六・三ヘクタール、記念植樹一・四ヘクタール、体験林業一八・四ヘクタールを予定。この中で教育森林的なものは、小学校低学年では楽しみながら自然観察や木の実採取をする「林業遠足」。小学校高学年は植林や木工細工。中学生は校内遠足による下刈り、つる切り、枝打ちなど体験させることにしています。

こうしたことのため学習場や展示場を兼ねた管理棟や回遊幹線道路、歩道の整備、休憩舎、小作業物、木工教室など設備。完成の暁には一五一二〇万人の利用を見込んでいます。北九州市の事業としておこない、事業費約一億円。

△大宮市▽

埼玉県大宮市のふれあいの森の対象地は隣県の福島県南会津郡の民有林と国有林三八ヘクタール。小中学生を森林づくりを通して教育しようという「教育課程」にそった体験学習を目的としています。

このため、スギ、トチノキの植樹や手入れ、きのこの森”でのきのことり、植物観察、けものなどの自然観察、森林浴などおこないます。実際の事業は、市内小中学校校長、教員代表、教委でつくった少年自然の家実施委員会が企画・立案し、地元の館岩村、山口宮林署の指導・助言も受けて、少年自然の家”がすすめます。事業主体は大宮市、事業費は二〇〇万円。

盛況 「ガキ大将スクール」

千人越え外国からも

群馬県上野村で開かれる「ガキ大将スクール」はことしで四年目を迎えます。このスクールは、野外での遊びを通じて自然とのふれ合いをとりもどそう——というねらいで、アドベンチャー集団D.O.！が始めました。対象は小学一年生から中学三年まで。

一九八二年は二五人、二泊三日でスタートしたスクールは、翌年は三泊四日になり四三一人にふくれています。三年目の昨年は四泊五日ですが一〇三二人。この中には台湾（二人）、香

港（一人）で生れて育った子どもが「日本の自然にふれさせたい」という親の希望で加わりました。四回目のことしは三泊四日で一回を予定、昨年以上の参加者が見込まれるといえます。ここでの日程は、まず班編成。八人の一グループにリーダーがついて、四日間何をするのか話し合います。「上野村で何ができるか」の話はしますが、決めるのは子どもたちです。リーダーは子どもたちの意見を生かすための条件など判断して遊びを支えます。

キャンプ、山登り、鍾乳洞探険、ロープ渡り、ナイフを使つての竹細工、間伐材などのマキづくり、魚つり、竹トンボ・竹馬など遊具づくり、川遊び、ハンゴ炊飯、キャンプファイヤー、かまどづくり、川原で石を積んで山賊ナベ、パーベキュー、オリエンテーリング、村のお年寄りの話を聞く、紙すきなどがくり広げられます。キャンプも、キャンプ場でない所を選び泊ります。「自然にインパクトを与えないで生活する」が身上。ナイフを使わせると七〇％の子どもが手を切りますが、そのことで子どもに正しいナイフの使い方を考えさせようというのです。なるべく自治自給——ということで、野草の葉をとって、おかずにすることも。リーダーは集めた野草や葉を「毒があるかどうか」見分けて教えます。

「最初は野外で遊んだことのない子どもたちですから、遊びも思いつきませんが、やっているうちにいろいろ考えて」とリーダーはいいます。両親もこのグループに入れません。親と別

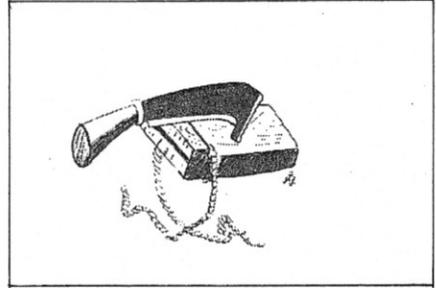
れて泣きべそをかく子、「ふとんをしいて」という子もいますし、自分の寝るところがつくれなくて涙ぐむ子ども——。やがて、星空の美しさを発見し、仲間との共同作業の中で自炊も、寝床も自分でできるようになります。「家を出るときは自分でふとんも敷けなかった子が、スクールから帰ると、自分でふとんをのべるようになった」と親を喜ばせるようになります。

「ことしは、十石峠に昔使つた二階建の造林小屋があつて、五〇一六〇人は泊れそう。もちろん、電気も水道もないから原始生活です。近くに村人も余り知らぬ鍾乳洞もあるのでその探険なんか考えられます」と夢もふくらみます。

主催の「アドベンチャー集団D.O.！」は六年前、群馬県ユース・ホステル協会のもとで野外活動に携つていた若者を中心に組織されました。「ガキ大将スクール」のため、高崎大学や群馬県立女子大学のユース・ホステルクラブ、ワンダーフォーゲルクラブなどの若者延一三〇人が協力（八五年）します。

ことしの参加費は三泊四日＝二万一〇〇〇円、六泊七日＝三万二〇〇〇円。しかし、スクールがこんなに盛況でも「アドベンチャー集団D.O.！」はまだ「赤字」(未払金)をかかえたままです。自然と親しむのも大変なのです。

「人間的な活動をするため、観光開発されない自然が残っている」とアドベンチャー集団D.O.！に白羽の矢をたてられ上野村(黒澤丈夫村長)も、「なんとか根づかせたい」と応援しています。



民有林の活性化

佐藤 和之



民有林の衰退は、山村地域の問題となっている。若い労働力の減少、若者の山離れ、林業の労働条件の高齢化、外材の輸入量の増大などの他にも、様々な原因が考えられるが、これらの問題に取り組み、解決していく事によって、山村の活性化がなされると思う。



若者の流出の原因は、山村地域の企業の少なさが考えられる。働く所さえあれば、山に住みたいと考えているが、労働条件、特に賃金の低さから収入の安定が図れない。若者がいないのであるから、地域全体が高齢化するのとは当然である。

森林浴ブームで山の中に入って来た人は、「空気のいい所がいいですね」と口々に言うが、「それでは、ここに住んではどうですか。」

と問いかけると、三日ぐらい住めばたくさんだと答える人がほとんどである。その人たちに頼るのは、無理なのである。



そこで考えられるのは、林業経営者の考え方の転換が必要だという事である。今までのやり方、つまり再造林と育林技術に重点をおいたのを、今後は国産材の流通面にもっと力を入れるべきである。

単に丸太を市場に並べて販売するというシステムに頼っているのは、今後の成長は望めない。なぜなら、原木の価格の低落時は、大量の原木を市場に出さなければ、林家の収入は多くならない。当然、木も十分に成長できないうちに、伐採せざるを得なくなる。これでは経営は行き詰まってしまふ。

これだけ多様化している現在、全国的に優良材、つまり技打ちした無節材がよいとなると、全国の林業地で優良材をめぐる産地間競争になり、やがては林業経営者同士の競

争にもなりかねない。これは決して前向きなものではない。

日本人は、檜作りで四方無節の柱で建築するのが高級であり、その樹種は、檜が最高、杉がそれに準ずるとされているのは、私には不思議でならない。それは、今まで、林業界に携わってきた人たちが、長い間に価値づけて来たものであるが、今後もその通りに推移していくと思うのは間違いないである。

なぜなら、車を例にとるなら、高級車は良いとは誰もがわかつてはいるが、いざ実際に手に入れるとなると、大半の人が自分の生活能力に合った車を選ぶのが現実である事から考えると、各林業地域も、地域に合った林業を、適地、適木、適施業を行いたい。それにより、多様化時代に対応できるであろう。



山村には、都会には無い山村の生活や自然環境があり、それぞれの地域性、気候、風土の違いを活かし、地域の独自性を出すべきである。しかし、その中に埋没してしまう事もある。林業家同志が論じ合っても、良い結論が得られない時がある。その場合は、山林所有者以外の地域の、異職業の人たちとの話し合いによって、良いアイデアを得る事が多いのに気付く。

木材のうち、住宅に多く使われている樹種

の生態を知り、高地に適したものを、低地に適したものをそれぞれの特性を活かし、生産し、育林と同時に、建築工法も研究すべきである。昔とちがって、需要者に選択され、ライフスタイルに合った住宅が求められている。いかに優れた材質を作るか、という事も大切であろうが、生活様式の変化をつかむ事も大事な事である。



従来の育林技術から脱皮し、その木材の特徴を活かし、付加価値を付けて販売する方向に頭を切り替えなくてはならない。しかし、木が製品となるまでの時間は、あまりにも長い。これがハンディキャップになっている。そして、日本の林家は、大半は小規模面積で、農業、あるいは会社勤めの傍ら、林業経営をしている人が多い。そのため、林業家独自で研究開発するのは、ほとんど無理である。それには、森林組合の組織を強化し、育林から住宅販売までを含めて、研究課題とする方向で協力し合う事が必要であろう。

住宅販売を手がける事は、最終需要者の嗜好がわかる事で重要である。森林組合の組織の強化が、事業の拡大になり、それが林家へも影響し、地域の活性化にもなり、森林を守る担い手を確保してそれが、民有林の活性化につながる。

(日光市在住・林業経営)

自然保護と森林と林業

——自然保護・琵琶湖大会に参加して——

上山たけし



(一)
去る六月八・九の両日、第一五回全国自然保護大会・琵琶湖大会が開かれた。

大会が、わが国最大の湖、びわ湖畔で開かれたのは、埋立て、河の人工化、観光：など「ありとあらゆる開発、破壊問題がびわ湖とその周辺に集中し」、「魚やヨシその他一切の生命系が破壊され」、このような「諸破壊のサンプルに泣くびわ湖が開発されつくした時、それは日本の破壊につながる」（大会宣言）という認識と危機感からであろう。

大会には、全国の山や海で街で、自然保護の運動をすすめている一三四団体、三八三名（主催者発表）が参加した。

たぶんごく少数の森林・林業関係者の一人として参加した私は、「国際森林年」の年ということもあって、これまで以上に自然保護の不可分な一環として森林と林業問題が論議され、交流と連帯が深まることを期待していた。

しかし、それはあまりみたまされなかった。例によって私は、ためらうことなく、「山」の関係の分科会にでた。

しかし、これまでの大会での「山を守る闘い」

や、「森林を守るたたかい」という分科会はなく、「山の開発と自然保護」の分科会しかなかった（しかしというのは、昨年の八ヶ岳大会では「森林を守るたたかい」と「山岳自動車道を考える……」の二つであったことと比べて、いわば「森林を守るたたかい」の分科会が欠落した、といえるからである）。

その討論テーマも伐採、造林、林道などの直接的林業活動、行為に関するものでなく、主として、自然公園の施設のあり方、自動車道、観光開発、登山のあり方等に関するものであった。この点では意見の対立はあったものの、造林や、林道、熱帯雨林の荒廃、割箸問題などが論議された昨年の八ヶ岳大会に比べても物足りなさを感じた。

大会のスローガンも、メインスローガンの「生存のための自然環境を守ろう——水は命の泉えらいこっちゃ琵琶湖」は当然として、一〇本のサブスローガンに直接、森林・林業に関するものはなく、わずかに「都市自然の保全のための施策を実施せよ」のなかに、都市の公園、都市森林の保全問題がふくまれている、と考えられるだけであった。

もちろん自然保護運動は、広はん多岐にわたるものであって、各時期の運動の具体的スローガンや、重点はバラエティーがあるのは当然ではあるが、わが国土面積の七割、狭義の七割の少し乱暴な言い方をすれば自然環境の七割が森林で占められており、森林と林業問題は、常に自然環境保全、自然保護運動の重要な一角と占めるべきだ、あるいはその一翼を担うべきだ、と考えるのは独りよがりのセクト主義だろうか。

(一)

第二分科会「山の開発と自然保護」の主要テーマは、サブタイトルにある「自然公園における施設について」であった。

実行委員会側から「高度成長が登山大衆現象を生みだし、観光開発の名で原生的自然の壊滅的破壊に加え、近年行政と資本による自然の人工化がすすめられている。自然公園はあるがままに保護されるべきであり、保護と利用を並列的に掲げた現自然公園法は保護優先の自然保護法に抜本改正し、行政の施設主義は排除されるべきだ」という趣旨の報告・問題提起がなされた。交流・討論のすえ、この趣旨の分科会決議がなされ、大会決議の一つとなった。

交流・討論では、立山、比良、南八ヶ岳、えひめ、名古屋、京都等、全国各地のスキー場、温泉等のレジャー、観光開発、施設、スカイライン、自動車排ガス問題、登山の大衆によるへい害、ダム開発、都市(再)開発等による自然破壊、排土問題等、「資本と行政」による乱開発、自然破壊の進行と、これに反対して、さま

ざまな困難のなかで地道な自然保護運動を続けている成果や、問題点、なやみがだされた。

討議の特徴、少し気になった問題の一つは、登山の大衆化に伴う問題がなくてなく(と私には思われた)論議されたことである。

安易な登山(による自然破壊)は民衆のたいはいだ、たとえ孤立しても訴えるべきだ、というのはうなずけないことはないが、山のぼりは権利ではない、極道だ、というのは比喩的な誇張としても肯定できない。

そして、この「登山権」が行政の施設主義、を呼んでいる、として、自然公園や、山岳(林)などにおける国や、公共団体による施設一般を否定するような主張についても同様である。

あらためてふれるまでもないが、重化学工業優先の政策による都市の過密化、公害のはん乱のなかで、あるいは労働の間疎外、職場砂漠化の進行のなかで、山や森にやすらぎといこいを求め、登山人口がふえ、森林浴が脚光を浴び、バード・ウォッチングが「野鳥の会」の大人たちだけではなく、小学生まで関心を呼び、参加するようになったのである。また、このような「資本と行政」の乱開発、公害多発に抗して生まれたのが自然保護運動であった。

正しい登山のあり方、自然への接しかた等は大きいキャンペーンすべきであるが、大衆的登山を敵視したり、森林浴等を非難している、とうけとめられるようなことは運動の大衆的發展に反すると思われる。

あえて否定的側面にふれたのは、自然保護運

動の国民的發展を願ひ、森林管理や林業生産にたずさる労働者と労働組合、広はんな林家と山村住民との交流、連帯を願うからである。

大会は、はじめにふれたスローガンを中心にした数多くの決議を採択した。

それは、基本的には歴代の保守政権と大企業による自然破壊、乱開発を克服し、人間生活と自然を守るための切実な国民の願いを反映した積極的側面をもつのである。

とくに私は、大会宣言の冒頭で「戦争は最悪の自然破壊であり、核の恐しさは地球の破壊にあります」、と高らかに宣言したことを(核兵器へ廃案)にふれない弱点はあっても高く評価したい。

(三)

森林をめぐる自然保護と林業の対立は、学界でもなお深刻だ、といわれるが、大気浄化、水源かん養、自然災害の防止などの物理的効用、公益的、国土保全機能は、健全な森林をつくり森林生産力を高めることで達せられるものであり、林地保全を基礎とする林業と自然保護の間に根本的な対立、矛盾はない。

さいわい「国際森林年」のことは、国民森林会議の札幌シンポジウム、秋田でのブナシンポジウムなど、各地で多彩な催しがおこなわれている。

これを一時的なイベントやキャンペーンに終わらせることなく、真に国民的な運動に発展させ、自然保護運動との連帯、交流を深め、発展させたいものである。(評論家)



緑の文明学会が発足

四月三〇日、緑の文明学会が発足しました。ちょっと聞きなれない学会ですが、国民森林会議の会員でもある福岡同学会事務局長に紹介いただきました。

福岡克也

一、生きる意味を問い直す
 緑の文明学会は一九八五年四月三〇日、東京・神田の学士会館で、現代文明の危機と地球生態系の破壊を憂える学者・文化人・言論人など多数の参加を得て発足した。
 一九七二年のローマ・クラブ「成長の限界」の警告に拘らず、この地球上では相変わらず、物質的繁栄を求め続ける先進国の浪費経済が拡大し、大気の汚染、水質の汚濁、環境の劣悪化が進行しつつある。高度成長による資源の収奪を受け、人口の増加と食糧の不足に悩む途上国では、焼畑移動耕作による熱帯林の焼失が続き、飢餓と貧困、そして砂漠化が現実のものとなりつつある。

二十世紀を通して築いてきた物質文明、人間の歴史とは一体何であったのであろう。地球生態系が危くなり、人間の価値が失なわれつつある今日、われわれは再び、物質文明のあり方、人間が人間として生きる意味を問い直さなくては根本的な解決の道を見出すことは困難であろう。

二、科学の原罪を知る

科学も同罪である。自由気ままに振舞う科学は、原子爆弾を作り出し、公害・汚染を作り出して顧みず、今また次々とバイオテクノロジーや合成化学の技術によって、自然のバランスを崩し、生物や種の尊厳をもて遊ぶ危険な賭けに走り出しつつある。既に科学の進歩にモラルはなく、飽くことを知らぬ経済は、科学を人間と自然のバランスの英知の位置からひきづりおろし、墮落の道に突き落としつつある。緑を回復するどころか、環境の汚染が進み、人間の復興どころか、文明の荒廃が進み、経済の再生どころか、自然の衰退が進んでしまっている今日、文明と人間の反省の科学をつくり出すことは至難の業である。しかし、在来の学会の枠組みに敢えてとらわれることなく、遠慮のない自由なかつ利害を考えない思考の集約によって、限りない破壊の道をひた走る人間の文明と地球の生態系に歯止めをかける最後の挑戦を試みようとする。それが緑の文明学会設立の目的である。

三、啓蒙運動への路程

この学会は協力会員という形で、どのような人でも参加できる。とくに国際的にも門戸を開

いている。外国科学者の参加によって世界的な科学運動との連帯もありえよう。既に米国ではニューサイエンス運動があり、フランスではエコロジスト運動、西ドイツでは緑の人々があり、社会主義圏でも、今日の危機を危惧する科学者は多い。既存の科学が、自らを超えうるか否か、国やサミットなどが、自らの利害を超えうるか否かに賭けられるだろう。

春・秋のシンポジウム、月例の問題別研究会、学会報の発行、普及会誌「緑の文明」の発刊、付属研究機関などの設置も検討されている。いのちと緑を守る人々との広い交流と連帯の輪を広げて行きたい。

(立正大学教授・緑の文明学会事務局局長)

超党派で議員連盟

森林・林業の活性化と木材需要の拡大を図ることを目的にした超党派の「森林・林業・林産業活性化推進議員連盟」が国会で旗揚げしたのは四月二十六日。その後二カ月の状況を北修二事務局長(自)に聞いてみました。

—その後会員にはどのていどに。

北 三八九人と衆参両院で最大の議員連盟になりました。国会議員の緑・林業問題についての関心の深さがわかる人数です。しかも、出身の都市山村を問わぬ参加ですから—。

—四月二十六日以後の取り組みはどうですか。

北 六月六日も役員会を開き、各党が共通できる問題として「需要拡大」について話し合い

ました。その中で自らも実践するというこ
手始めに、木製の名刺をつくらう—とい
とになりましたが、今日（六月二〇日）ま
九八人が申込む盛況です。

名刺ぐらいと思われるかも知れませんが、私
が北海道の市町村長に改めて名刺を出すこ
ありませんが、木製の名刺を出すことで、「木
を身近に生かす」という思想を相手に伝えるこ
とになります。その思想拡大に議員連盟一人ひ
とりが立とうということです。

—なるほど。

北 一九日にも全会員が集まり、田中林野庁
長官から林業・林産業についてレクチャーを受
ける勉強会をしました。近く現地も見てさらに
突込んだ勉強をし、国政の場に超党派で生かし
たく思っています。

役員は次の各氏。カッコ内の参は参議員。

▽会長 丹羽兵助（自民）▽会長代行 広瀬
秀吉（社会）▽副会長 羽田孔（自民）玉沢徳
一郎（自民）大河原太一郎（自民・参）高鳥修
（自民）川俣健二郎（社会）馬場昇（社会）鈴
木一弘（公明・参）林百郎（共産）▽理事 谷
洋一（自民）東家嘉幸（自民）畑英次郎（自民）
保利耕輔（自民）鈴木省吾（自民・参）降天敬
義（自民・参）松沢俊昭（社会）村沢牧（社会
・参）大野潔（公明）小沢貞孝（民社）津川武
一（共産）石原健太郎（新自）江田五月（社民）
▽事務局長 稲富稜人（民社）▽事務局次長 北
修一（自） 敬称略

△設立趣意書▽

わが国の林業・林産業を取り巻く環境は、住
宅建設の不振等から木材の需要が著しく減退し
木材価格が低迷を続けているが、一方で林業経
営費が増大するとともに路網等の生産基盤整備
の遅れも加わって、木材生産活動が停滞し、健
全な森林の育成に欠かせない保育・間伐の遅れ
がめだってきている。また、木材生産の場であ
る農山村地域における過疎化・高齢化が進み、
林業労働力の弱体化が顕在化しつつある。

国有林野事業をみても、これまで国土保全、
水源かん養、保健休養の場の提供等いわゆる公
益的機能の発揮、林産物の持続的・安定的供給
地元農山村地域振興への寄与等、その使命を
発揮してきたが、財務事情の悪化等からその再
建が急務となってきた。

こうした状況の中で、山地災害の増加、水需
要の増大、都市部における生活環境の悪化等
から、森林の有する公益的機能の発揮や緑資源の
確保に対する国民の要請が高まっている。

このような厳しい情勢を改善せざるに在ること
は、林業・林産業を衰退させるばかりでなく、
農山村社会の崩壊と国民共通の財産である森林
の有する公益的機能の低下を招く恐れがある。
したがって、民有林、国有林及び木材関連産
業が一体となって、森林の有する公益的機能の
高度発揮に努めるとともに、それに直結する森
林・林業の活性化と木材需要の拡大に総力を
挙げて取り組むことが緊要である。

こうした観点に立って超党派の「森林・林業

・林産業活性化推進議員連盟」を設立し、強力
な施策を推進する。昭和六〇年四月二六日

関税引下げ林業対策

木製品の関税引下げによって打撃を受ける林
業・林産業に対する「救済」案が農林水産省の
手でまとまり、六月一三日、首相など関係方面
へ実施が要請されました。この案は

- 1 木材需要拡大（①木造施設の建造、需要拡大運動、③新規用途の開発・実用化）六〇億円。
- 2 木材産業の体質強化（①生産性・品質向上技術の開発と新分野への事業転換、②国産材への原料転換、③合板製造業と製材業の過剰設備の廃棄）三二〇億円（融資五六〇億円）
- 3 間伐・保育等森林・林業の活性化（①作業道等の整備、②間伐材の利用と流通の合理化、③生産・流通に関する技術機械の開発、④森林組合等運営資金の融資、⑤市町村による間伐・保育促進運動、間伐材を利用した村起し運動の推進、⑥分収育林の推進）四七〇億円（融資六〇〇億円）。

木製品（丸太は無関税）の関税引下げは、ア
メリカの圧力によるもので、諸外国より低い関
税をなぜさらに引下げねばならないのか—と
いう基本問題をタナ上げしての対策といえます。
そうした基本問題を別にしても、当初三〇〇
〇億円（自民党）発言が、実質国費支出八五〇
億円に圧縮されたのは、財政当局の顔色をうか
がった案との批判も強くあります。

切り抜き森林・林政ジャーナル

〈地方新聞・この三カ月〉

1月

■デリー東北 大人気ですヒバ製品 大畑町の工芸組合 不適格材を生かし 市価の半値 地場産業に (13日)

下北郡大畑町に、特産のヒバでテーブルやこけしなどを作って売りに出しているグループがある。建具職人や製材業者、町議、木工マニアの民宿の主人らが昨年三月に結成した大畑ヒバ工芸組合(大竹欣哉組合長)で、製材所に山積みされているヒバの不適格材を利用することから、値段は市価の半値。自然木ブームもあって、地元の薬研温泉郷をはじめ県外からも注文が殺到、生産が追いつかない状態。大竹組合長は「ゆくゆくは下北を代表する地場産業に育てていきたい」とうれしい悲鳴を上げている。

現在、組合員は十三人。うち大竹組合長はじめ四人が町議とあって「下北を代表する地場産業にしよう」と意気込みは盛ん。同組合で作った作品は、昨年の

大畑港まつりやむつ市商工まつりなどに出品され、本物志向の人々の人気を集め、飛ぶように売れた。わずか十三人の組合員だから、注文をさばき切れず、「とても作れません」と断っているのが現状。新製品は、碁や将棋の盤をはじめ卒塔婆(そとば)まで増えている。「工夫しだいで何でもできる」と福岡さん(元町議、民宿・食堂経営)。

今後の課題について、大竹組合長は「首都圏に販路を拡大したいし、高齢者や主婦らを雇用して特産品、地場産業まで育てたい」と語り、「いつかはヒノキをしのぐようになる」と、あすなるに大きな夢を膨らませている。

■北海道新聞 「外壁材にカラマツ混入」 道内企業が今秋から生産 間伐材活用で道(18日)
道立林産試験場が開発した特許技術を使い、初めてカラマツを混入した木質セメントボードが道内企業の手で製造されることになった。ヤニやねじれなどで利用法が

課題となっているカラマツ間伐材の活用のモデルケースとして期待されている。

この製造に乗り出すのは、北見市に本拠を置く山上グループ(山上建設など十三社、山上登江代表)で、このほど新会社の北海道ラーイチ(本社・札幌、西世孜能社長、資本金五千万円)を設立した。恵庭市の工業団地内に約二万㎡の土地を近く取得し、工場を建設する予定。操業開始は秋ごろを見込み、当初は年間六千トンの生産し、十五億円の売り上げを見込んでいる。

製品の木質セメントボードは、主に住宅の外壁材として需要が伸びている。従来の技術では、チップ(細片)状にしたカラマツをセメントに混入すると、セメントが固まりにくかったが、道立林産試験場が特殊な処理法を開発、遮音、耐火、断熱などの性能にも優れた製品が作れるようになった。

2月

■陸奥新報 虫喰い材が高級床柱

に 鹿児島県の宮林署が開発、温泉治療で変身(4日)
【鹿児島】害虫に喰われ、ほとんど商品価値がなくなった杉材を温泉に漬け、銘木としてよみがえらせるというユニークな方法を熊本宮林局加治木宮林署(始良郡加治木町)が開発した。温泉処理後の杉材は床柱用として高値で売れそう、林業関係者も注目している。

九州では昭和二十八年ごろからスギザイノタマバエの幼虫による森林被害が広がった。被害木は枯れたり、樹皮がボロボロになったりし生き残ったものでも表面にイボ状の突起や小さな溝が無数にできるため、チップ材用として一本千円足らずでしか売れない。

同宮林署が被害木の温泉熱利用の加工方法に着目したのはひよんなことから。昨年、敬老の日に老人ホームに贈るツエを製作したが、カシなどの広葉樹の皮をむきやすくしようと同郡牧園町硫黄谷の同署所有の温泉(八〇度)に漬けてみたら、見事な光沢が出た。これをヒントに杉材を二日間温泉処理をすると、虫に喰われた穴を木肌が自然に巻き込み、美しい凹凸のついた床柱に最適の高級材になった。

カビも発生しにくいうえ、年輪がちなため、ひび割れ防止の背割りや中心のくり抜きも必要ない。同営林署はこれを「霧島変木磨丸太（きりしまへんぼくみがままるた）」と名付け、三月に初出荷するが、一本が数万円から数十万円台と、天然の床柱用材に近い値段がつくと期待している。

日比野義光同営林署長は「商品価値のほとんどない厄介物が一転、高級銘木に変身できた。今後、年間百本程度を製作したい」と話している。

■陸奥新報 北米の山林を買収

中国が木材需要に対処（25日）
貿易業界によると、急ピッチで経済建設を進めている中国が、北米の山林を抜採権付きで買収する動きをみせている。これは年々増大する木材需要に対処するため、従来の木材輸入から一歩進んで、山林の立木をまとめ買いするもので、木材の長期安定輸入を狙い、中国側は山林買い付けに当たって、わが国の大手商社に協力を要請しており、日本側もこれを受けて仲介あっせんの協力を乗り出した。中国は昨年、中国国際投資信託公司（CITIC）が中心となつて、米国西海岸の二つの山林を合計二十五万立方尺、買収した。

これはいづれも経営難に陥った米国パルプメーカーの所有林の伐採権を期限付きで買いつつたもので、買収額は約四千二百万ドルだった。今年になって新たな動きをみせているのが、中国の木材輸入の総元締めである土産畜産総公司。同公司は毎年四百万一五百万立方尺の北米材を輸入しているが、年々増えつつける木材需要を満たすために、新たに山林買収を計画、わが国の大手商社に協力を要請してきた。

要請を受けた大手商社の日商岩井によると中国側は主に米マツ、米ツガの産地である北米西海岸の山林を対象に売り物を物色中で、買い付けの際、資金協力を含めて日本側の協力を得たいとしている。これを受けて同社は近く、同公司のシアトル駐在員らと協力して北米の山林の買い付けに乗り出す計画だ。

中国側がこうした山林買い付けに動き出したのは、ここ数年の木材需要の急増が背景にある。中国の木材需要は年間五千万立方尺とされるが、開放経済政策による経済建設の進展で土木、建築、内装用を中心に需要はうなぎ登り。輸入量も一九八二年の四百万立方尺から七百五十万立方尺に急増して

いる。

3月

■日本海新聞 伐倒の神木を接ぎ木 長寿の遺伝子究明へ 智頭の林木育種場（21日）

智頭町大内の大内神社にそびえていた大ヒノキは、地区民から神木として親しまれてきたが、老化が進んだため、昨年夏に惜しまれながらも伐倒された。この神木の血を継ぐ二世の育成が町内の関西林木育種場山陰支場（伊田貞雄場長）で取り組まれている。接ぎ木で増やし遺伝子の研究を行うのがねらいだが、来年には生長した二世を大内神社に寄贈する計画で、実現すれば地区民にとって縁起のよいプレゼントになる。

大内神社の境内にそびえていたヒノキは、樹齢四百年と推定され、神社のシンボルとなっていた。しかし長年の風雪で幹にさけ目が生じるなど傷みがひどくなった。このため地区では被害が広がらないよう幹をワイヤロープでしるなご対策を講じていた。しかし、台風や雪などで倒れる恐れが出てきたことから、伐倒することになり、昨年八月に切り倒されてしまった。同支場では、全国でも屈指の巨大ヒノキに着目。「ここまで育つ

には優れた遺伝子があるはず。接ぎ木で増やし品種改良に役立てる」（佐々木隼人業務課長）となつた。さっそく倒されたヒノキの枝を持ち帰り、同支場で育苗中の二年生苗木を使い、五十本を接ぎ木した。

普通ヒノキの接ぎ木は春に行われるが、伐倒時期が八月と条件が悪く、活着が心配されたものの、技術が生かされ、ほぼ一〇〇%成功。二世づくりが着々と進んでいる。こうした取り組みに地区民は「境内の見慣れた大ヒノキがなくなり、さびしい。実現すれば大事に育てたい」と楽しみにしている。なお、樹齢は伐倒後、年輪を調べたところ、四百八十六年まで確認。こうした巨木は県内にはなく、全国でも屈指の折り紙がつけられた。このため、同支場では一部を標本加工し、場内に展示することにしている。

購読会員募集

森林・林業を守り育てる仕事に参加する方を求めています。購読会員は年会費三千円で、季刊『国民と森林』の購読ができます。

郵便振替

東京2・70096

第三回朝日森林文化賞に三会員

このほど決った第三回朝日森林文化賞に、国民森林会議会員から三人が選ばれました。三人の業績など紹介します。

森づくり

・奨励賞

石原猛志さん

石原さんの受賞は、自然保護と林業を両立させる複層林施業によるもの。

岐阜市から車で二時間余りの郡上郡明方村にある九三六ヘクタールが石原さんの「持山」。四七名が人工林ですが、二〇〇ヘクタール余りはスギだけでなくヒノキとスギ、カラマツとスギと組合せた複層林。

石原さんの造林は「スギの直さし」と呼ばれるもの。六一一五年生の造林木からとった枝を林地にさしつけて根づかせるやり方。広葉樹の二次林だった山を一斉伐採して植林するやり方から一九六〇年頃から広葉樹や針葉樹の林内にさしつけることに変わりました。いわば大きな木の下に植え込むことで異年齢の林が出現しました。これが二段林（複層林）なのです。

大きな木を伐つても、その下には小さな木があつて、林地は露出しません。しかも、間伐のくり返しによって経営も安定します。

石原さんを代表取締役とする「石原林材」には、男一八一一人、女一〇人（みがき丸太などの製品加工に七人）が働いています。複層林仕立て―間断ない収穫―製品加工という中で雇用確保にも一役。

（本誌No.11に報告）

国際森林年

特別記念賞

神足勝浩さん

「FAO（国際食糧農業機関）の八一年の発表によると『正常伐採を越えて伐採してもなお最小需要がまかなえない地域』『正常伐採を越えて伐採して辛うじて最小需要がまかなえる地域』の人口は一九八〇年で一四億人、二〇〇〇年には三〇億人が、燃料不足になります。『これら開発途上国では木を植えれば緑化できるというものではない。サバンナ化など土壌の条件も悪い。と同時に植えても放っておけば薪炭用に伐られたり、焼畑になってしまう』。

国際協力事業団参与の神足さんは、開発途上国の森林づくりの難しさをこういいます。神足さんが、先進国日本からの森づくりの指導として訪れた国は五〇カ国を超えました。

緑の地球防衛基金の理事としても、日本が緑の地球防衛に果たす役割を説く神足さんですが、「それにしても、間伐材の投げ捨てなど、木材資源の利用の態度は、世界中で日本が一番悪い。他国の緑を心配する前に、自国の木材資源を大切に、需要の節約を」（受賞インタビュー、朝日）ともいっています。

（本誌No.1・2・4・8に報告）

森づくり

・奨励賞

真砂典明さん

名古屋生れの真砂さんが東京の大学を出て勤めた和歌山県庁。そこで竜神村を管内とする日高地方事務所林務課に勤務しました。こうしてきつかけで養子先の真砂家の一六〇ヘクタールの山林経営にかかわるようになりました。

「地域林業の発展なくして、個人林業の発展もない」と一九六九年に若手経営者で林業懇話会を発足させ、翌年には村・県の出先、森林組合などの林業関係者を集めた林業開発会議をつくりました。

村面積の九五％が森林、その七〇％が人工林化されています。このスギ、ヒノキ材を、吉野材に負けない銘柄に育て上げたのは育林技術と地域一体の振興対策が実ったことです。

真砂さんは、一九七一年に山の作業員に週休制を導入。「雨降りは休み」という不安定な雇用を克服のため、木工品づくりも始めました。「木ホルダー」「ループタイ」「木芸エト」など創意工夫した製品で全国にも愛好者が増えてきました。自家の森林を教育森林としても解放している真砂さん。「今回の受賞は仲間全体の受賞」といいます。

（本誌No.6・7に報告）

人類生存のカギは森林に

雑木林の経済学

室田 武

会員の室田武さんが「雑木林の経済学」(樹心社・¥1600)という本を出版されました。

一九八一年から八四年にかけて発表されて九本の論文に書き下ろしを加えて「雑木林のエコロジー」「核時代を超える脱石油文明の処方箋」「水土を保全し活用する技術」「土壌微生物と雑木林」の四章を展開しています。

筆者の考えは「私たちの生活は森林とそれが育む水土の上に初めて成り立っているわけだが、肝心の森林が石油文明の大繁栄の中で衰微の傾

向を示しているとすれば、私たちのくらしも奈落へと転落しつつあるわけだ。石油文明との心中を望まないなら、政治や教育に過大な期待をかける前に、それぞれの人がとりあえずできるところから森林へのかかわりを回復することが肝要」(58ページ)というもの。

筆者自身も、教鞭をとる一橋大学のゼミの学生を連れて山中で炭を焼き、水車エネルギーの活用に汗を流します。その目で見てもっと雑木林の評価を説くのです。

.....会員の出した本.....

日本農業の源流をさぐる

秘境への旅 チベット・ブータン紀行 野添憲治

会員の野添憲治さんが「秘境への旅」(無明舎出版・¥1500)を発行されました。

副題に「チベット・ブータン紀行」とありま

すように、日本人として足を踏み入れること

までインド、ネパール、中国のチベット自治区を歩き続けてきた」(142ページ)という旅の報告なのです。

秋田の地で農民を見つづけてきた筆者のこうした目はいたところにあります。

作業場に運び込まれた青稞は棒で叩かれ脱穀、それを空中に放り上げて風選するのですが「一粒の青稞も粗末にしないという真剣な農民のまなざし」を見ながら筆者は「日本の農業は機械化や省力化を急速にすすめたり、兼業化という

西ドイツで八三年の調整によると三四%の山林が酸性雨の影響を受け、前年の八%から大幅に被害が拡大している(16ページ)ことなど世界的な危機も紹介。ポーキサイトからアルミ一トンを得るのに淡水一〇〇トン、鋼材一トンをつくるのに淡水一〇〇トンが必要ということを紹介し、日本の工業化を支えたのは森林と水と

アメリカでは八五年にはエネルギーの三・八%の原子力を越え木質エネルギーが七% (日本は〇・〇五%)を占めるとの予測も紹介し、(237ページ)生態系を生かし、人類が二一世紀に生き残るために雑木林をふくむ森林と林業の重要性を啓蒙した一書といえるでしょう。

形で農業に専念できない農民が多くなることによつて、こうした農民のまなざしが失われたのではないだろうか」と「農産物を生産する魂が農民の内部からも消えてきた」と日本農業の近代化の問題を抽出します(49ページ)

また、「苦しい時代を知らない青年のなかには現在の生活に文句を言ったり」と語る農奴時代を知る老農の言葉を紹介しているあたり(54ページ)にも、「近代化」にゆさぶられる日本の現状が重ね合わされています。

東北部に密林のあるチベットや、インド国境からブータンの内陸へ入る山々のみごとな照葉樹林(164ページ)の紹介もあります。

(青稞・チンコウ裸麦の一種)

会の動き

第3回臨時総会（3月30日）

半田幹事の開会の辞についで、杉本幹事を議長に選出。委任状をふくめて五九人の出席で総会は成立。隅谷会長は「三年前に発足し、世間の注目を集めてきたが、このほど初めての提言をまとめるに至った。さらに会の目的を果たすために、会員の英知を結集したい。そのための総会の成功を期待します」とあいさつ。

出席会員の自己紹介の後、経過報告（萩野事務局長）、「山村問題と林業の担い手」についての中間報告（大野プロジェクト座長）、会計報告（北村幹事）、同監査報告（近藤監査人）から報告。議題に入り、活動及び事業計画（萩野事務局長）、「教育森林」の提言について（大内プロジェクト座長）、会則改正（萩野事務局長）、予算案（北村幹事）が提案され、質疑に入りました。

そのあと総会宣言を全員の論議でまとめ、田中幹事長が発表して総会を終わりました。

△「山村問題と林業の担い手」討論要旨▽

○①法制度でどう変えるのか ②「もっからぬ空間」は下流のためにも大切だがどう生かそうとするのか ③山村の役割りは国有林問題もふくめて討論することが必要

幹・山村は多種多様、それをつめると法・制度につき当たる。さけて通れぬ問題だ。

○①山村の林野所有は圧倒的に小面積だ。その山を守っている人の願いは社会保障など人が

総会宣言

美しい国土と豊かなみどりを子孫に残すため、わが国森林の望ましいあり方を求め、また地球規模での森林の保護育成を考へて、私たち同志が相携へ、国民森林会議を結成してから三年が過ぎました。

国内外の情勢は、社会・経済・技術などいずれの分野でも予想を超えた激しい変化をみせています。なかでも山村の過疎化や青少年の教育問題など、今日の深刻な社会問題は、いずれも過去の行きすぎた経済至上主義のヒズミともいえるものであります。

森林の荒廃も、山村の過疎も、このような過去の政策のシワよせであり、その是正への努力こそ、急務であります。

みどりが賛美され、うるおいのある生活が求められている点で今日ほど森林に対して、人びとの関心と期待が寄せられている時はありません。にもかかわらず、森林、林業をめぐる事態は一層深刻の度を増しつつあります。

このような事態を打開するために、わが国民森林会議はこれまで全国的視野に立って英知

を集め行動する必要性を主張し、努力を重ねてきました。

山村や森林問題の解決には、理念だけではなく、実践の可能なことが前提となります。そのこともふまえ、今回「教育森林」の創設を提言し、また「山村問題と林業の担い手」についても、問題の所在を明らかにしました。今後の適切な方策提起と実践こそが重要です。

今年「国際森林年」にあたり、年間を通じて各種の関係行事が各地で催されます。行政の面でも林政の抜本的改革の必要性が話題に上っています。

これらの問題の克服には、政治の決断と国民の理解と協力が不可欠です。とくに、国民それぞれが森林をみずからの問題として、とらえなおすことが出発点になります。

今回の総会に当たり、これまで努めてきた各種の研究や各地のシンポジウムの開催などの諸活動を今後も一層幅を拡げ、充実させることを決意し宣言します。

一九八五年三月三十日

国民森林会議第三回臨時総会

方の三つは当然検討されなければならない。

○①村外の大山村所有者 ②労働者の後継者対策に社会保険の充実などふくめる必要。山村に人口が再び戻するには抜本策が必要で、それがないと山村は崩壊する ③専業林業技術者を育てることに目を向けてほしい。

○①収益性・教育問題から山村に住まないようになった。都市なみの生活ができることが大

切。そのためにどんなものをおくか考えるべき
②山村出身者が都会で退職したら帰村できる対策を。

△「教育森林」討論要旨(字句修正など除く)▽

幹・提言し放しでなく、運動としてどう定着させるか試行錯誤を重ねながら実践したい。会員もそれぞれに働きかけ実現するよう協力をいただきたい。希望地があればモデルケースとして、プランを押しつけるのではなく、地元の創意工夫で種々の試みをしてほしい。その中で助言を求められればお手伝いしたい。
○提案で終るのでなく、山の中の行動、服装、地形など教えるという基本的テキストを示した方がいい。

幹・マニュアルは経験をつみ重ねてから。

○提言に止めていいのではないか。

○時誼を得た提言と思う。文部省も「自然教室」などで動いている。

○林野庁も動いている。

○受入れるとしたら大仕事になるが努力(候補地の会員)

○国際児童年の時一時やった経験からいうとすべての条件が満たされなくても、誰でもどこでもやるのが大切。そこから道が開ける。林業グループでこの提言を生かしてやってみたい。

幹・提言で終りというのではなく、プロジェクトは積極的に取り組むことでまめたい。

△会則改正▽

主要点は、総会の毎年開催(旧会則は隔年総会)を決めました。

第16回幹事会 (3月30日)

出席者(敬称略) 隅谷・大内・大野・北村

・杉本・志村・田中・半田・萩野

第3回臨時総会で事務局側のすすめてきた対策の報告と当日の任務分担を再確認。

第17回幹事会 (5月25日)

出席者(敬称略) 隅谷・大内・大野・北村

・杉本・志村・田中

△報告事項▽

1. 「教育森林」創設の提言の関係方面への要請

2. 国民の森林を考える北海道フェスティバル準備

3. 「山村チーム」の討議の経過について報告

△協議事項▽

1. 「教育森林」創設について

今後の要請対策とモデル地区設置の対策

2. 「国民生活と森林」チームの今後の取り組み

(1) 九月上旬、プロジェクトを開き国有林の現状についての資料をもとに討議

(2) 委員として、福岡克也氏・岡和夫氏を加える。松沢譲氏は山村プロジェクトへ

3. 「山村問題と担い手」チームの今後の取り組み

(1) 六月二七日プロジェクトを開き、討論。

(2) その上で起草委員を和歌山に派遣し、現地の会員と意見交換をしまとめ案づくり。

4. 第18回幹事会
9月14日(土)11時から大日本山林会会議室。



編集後記

○……このところマスコミの対応に追われています。といっても見たり、読んだりの方が……。

ざっと六月になって拾っても、六月九日にはNHKTVで「老人と森」が放映されました。会員の高橋延清さんと札幌シンポジウムでパネラーになる倉本聡さんを通じて描くドキュメントです。二十日にはNHKTVの九州各局を結び森林・林業問題が特集。これに福岡克也さんが出席されました。六月六日付では第三回朝日森林文化賞の入賞発表、一五・一六日は秋田で「ブナシンポジウム」。これには沼田真さん・市川健夫さんが出席。二十四日から五日間東山顧問がNHK市民大学で。まだまだ見落としがあるかも知れません。

○……たしかに動いているのです。国際森林年という一つのことが、森林、林業の将来を憂う人びとによって営々と続けられた努力が、マスコミの注目をあびて一気に花が咲いたようにも思うのです。その花が実を結ぶかどうか——環境が厳しさを増す中で会議の任務もまた大きいのです。

○……札幌のシンポジウムも大成功でした。全幹事が開催地に足を運んだのも初めてですが、現地実行委員会や後援の道・各報道機関の熱気が感じられたからでした。

○……次号は秋、実りの季節ですが、この動きの一つでも結実させたいものです。

森林の未来を憂えて

—— 国民森林会議設立趣意書 ——

日本の風景の象徴である松林が枯れつづけています。近年、台風や豪雪で各地の山林が大きな被害をうけました。また、森林を伐りすぎたため、水資源の不安が強まっています。

一九六〇年代の高度経済成長のもとで、人びとは農山漁村から大量に都市へ流出しました。とくに林業の分野では、戦後大規模に造林を進めたにもかかわらず、その手入れはなおざりにされています。

日本の森林は、いま病んでいます。このままではわが国の文化を育んできた森林・山村はさらに荒廃し、その未来はまことに暗いといわねばなりません。

このような現実を見ずしてよいのでしょうか。いま私たちは、次のような課題の解決を迫られていると思います。

一、二世紀初頭までには、地球上の森林の二割が失われるといわれています。人類にとつて重要な機能をもつ森林に、私たちはどのように活力を与え、守り育てていくべきでしょうか。

一、森林は、林業にかかわる人びとによつてこれまで辛うじて支えられてきました。このままでは、その担い手を失う日が近いのではないのでしょうか。

一、山村に住み、林業で働いている人びとと、都市に住む人たちとはどのように手をにぎり合えるでしょうか。

一、いまみられる私有林や国有林の危機的状態は、どのようにして克服することができのでしょうか。

一、いま、わが国は、木材需要の七割を外材に依存しています。森林資源の枯渇する中で、開発途上国の森林にどのようにかかわるべきでしょうか。

このような森林をめぐる諸問題の解決は、決して林業関係者だけにゆだねておくべきではありません。美しい国土と緑の子孫に残すために、日本の森林はどうかあるべきか、いまこそ国民的合意を高める必要があります。

私たちは、以上のような国民的立場から、将来の森林や林業、山村のあり方を方向づけ、提言としてまとめ、その実現を期したいと思います。このためには、広い視野と長期の展望に基づいた英知の広範な結集がぜひ必要です。

そこで「国民森林会議」を設立し、広く国民・政府に訴えることを決意するに至りました。多くの方々のご賛同とご加入を望んでやまない次第です。

一九八二年一月九日

季刊 国民と森林

1985年夏季号

第13号

■発行 1985年7月1日

■発行責任者 隅谷三喜男

■発行所 国民森林会議

東京都港区赤坂1-9-13

TEL 03(583) 2 3 5 7

振替口座 東京2-70096

■定価 1,000円(千円)

(年額 3,000円)